下鴛原ナカダン遺跡

1998. 3

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は石川県金沢市下鴛原地内に所在する下鴛原ナカダン遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は犀川総合開発事業付帯市道建設工事（２級幹線340号）上辰巳・熊走線建設に伴う事前調査で、金沢土木事務所の依頼を受けて石川県立埋蔵文化財センター調査第一課が実施した。現地調査は、調査第一課主事 木立雅朗と、主事　澤田まさ子、嘱託 白田義彦を調査担当として、平成５年11月１日から平成６年１月20日まで行った。

3　現地調査に際し、石川県土木部河川開発課、辰巳ダム建設工事事務所、下鴛原町会にご協力いただき感謝いたします。

調査作業員

相合谷町　青山清子・小坂君子・山下きよ子・奥村美代子
竹内つよ・和田愛子・高野利子

鴛 原 町　小高幸子・小高達雄

下鴛原町　小西鈴枝・小西栄作・瀬戸富美子・毎田利吉
毎田花子・水谷勇吉・水谷君子・大窪政男

辰 巳 町　大藤さよ子

4　遺物整理は、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して平成９年４月７日から同５月16日河村祐子・新谷由子・角間律子・宮本巳恵・新屋美和の各氏が、直営の整理作業は、島崎博美氏の補助をえて澤田が行なった。

5　本書における挿図などの扱いは以下のとおりである。

(1)　挿図中に指示した方位は座標北である。また、土層断面図の水平基準の数値は、海抜高（単位ｍ）で示す。

(2)　挿図の縮尺は図中ならびに目次に示した。

(3)　挿図と写真図版の番号とは一致している。

6　本書を書くに金沢経済大学教授藤則雄先生より石質鑑定と玉稿を頂いた、また当センターの職員諸氏におよび埋蔵文化財保存協会諸氏に種々の教授を得た感謝します。

7　調査にかかる記録図面、記録写真・スライド類・出土遺物などの資料は石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

目　　次

第1章　調査に至る経緯と経過

第1節　調査に至る経緯……1
第2節　調査の経過……4

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境……5
第2節　歴史的環境……5

第3章　遺　構

第1節　調査区の位置と地区割り……10
第2節　基本土層……13
第3節　遺構……13

第4章　遺　物

第1節　縄文時代の出土遺物……14
第2節　近世の出土遺物……15

第5章　下鴛原遺跡出土石器の石質……29

第6章　まとめ……31

挿図目次

第１図　遺跡の位置……1
第２図　試掘土層と試掘位置図（S=1/1,000）……1
第３図　周辺の遺跡（S=1/25,000）……2
第４図　下鴛原周辺の地形（S=1/20,000）……4
第５図　基本土層略図……5
第６図　調査区位置図（S=1/15,000）……6
第７図　調査区平面図Ⅰ（S=1/80）……7
第８図　調査区平面図Ⅱ（S=1/80）……8
第９図　調査区平面図Ⅲ（S=1/80）……9
第10図　調査区平面・グリッド図（S=1/240）……10
第11図　集石遺構（S=1/40）……10
第12図　調査区北壁土層断面図（S=1/40）……11
第13図　風倒木図（S=1/40）……11
第14図　調査区東壁土層図（S=1/60）……12
第15図　出土縄文土器第１図（S=1/3）……16
第16図　出土縄文土器第２図（S=1/3）……17
第17図　出土土器第３図（S=1/3）……18
第18図　出土石器第１図（S=1/3）……20
第19図　出土石器第２図（S=1/3）……21
第20図　出土石器第３図（S=1/3）……22
第21図　出土石器第４図（S=1/3）……23
第22図　出土石器第５図（S=1/3）……24
第23図　グリッド別石器・土器分布図（S=1/540）……31

写真図版目次

PLATE
第１図　調査区遺構検出状況
第２図　調査区完掘状況
第３図　調査区南壁土層断面・風倒木断面
第４図　出土遺物１土器
第５図　出土遺物２土器
第６図　出土遺物３石器
第７図　出土遺物４石器

表目次

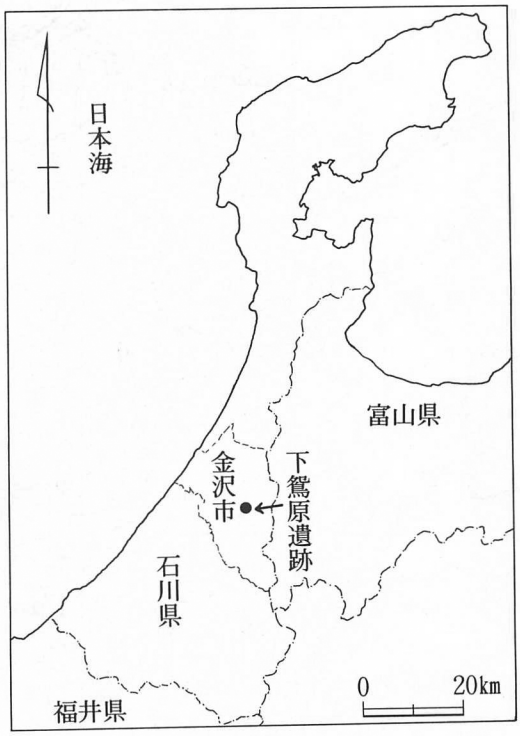
第１表　周辺の縄文遺跡……3
第２表　周辺のその他の遺跡……3
第３表　下鴛原土器観察表……19
第４表　下鴛原石器計測表Ⅰ……24
第５表　下鴛原石器計測表Ⅱ……25
第６表　下鴛原石器計測表Ⅲ……26
第７表　下鴛原石器計測表Ⅳ……27
第８表　下鴛原底部観察表……27
第９表　下鴛原集中区土器出土状況……28
第10表　下鴛原遺跡石器の種類とその頻度……29
第11～19表　石器の石質……30

第１章　調査に至る経緯と経過

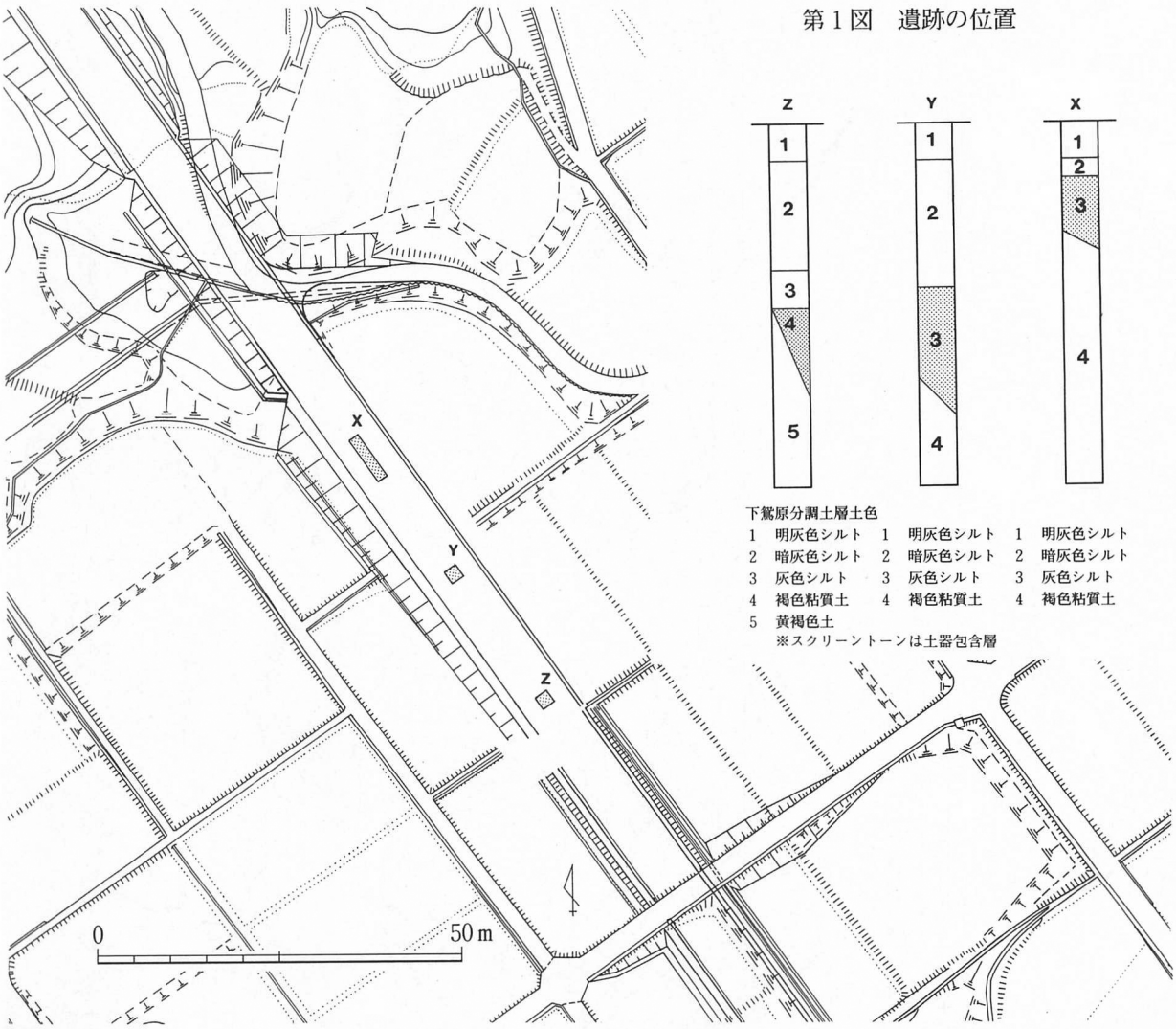
第１節　調査に至る経緯

下鴛原遺跡は石川県金沢市の南東部白山山系及び砺波丘陵に連なる丘陵部に位置する。下鴛原の調査は、犀川総合開発事業付替建設工事、２級幹線－340号上辰巳・熊走線－の工事に伴う緊急発掘調査である。下鴛原遺跡は県遺跡番号01027の遺跡であり、地域のあざではナカダンと呼称されていた地区である。

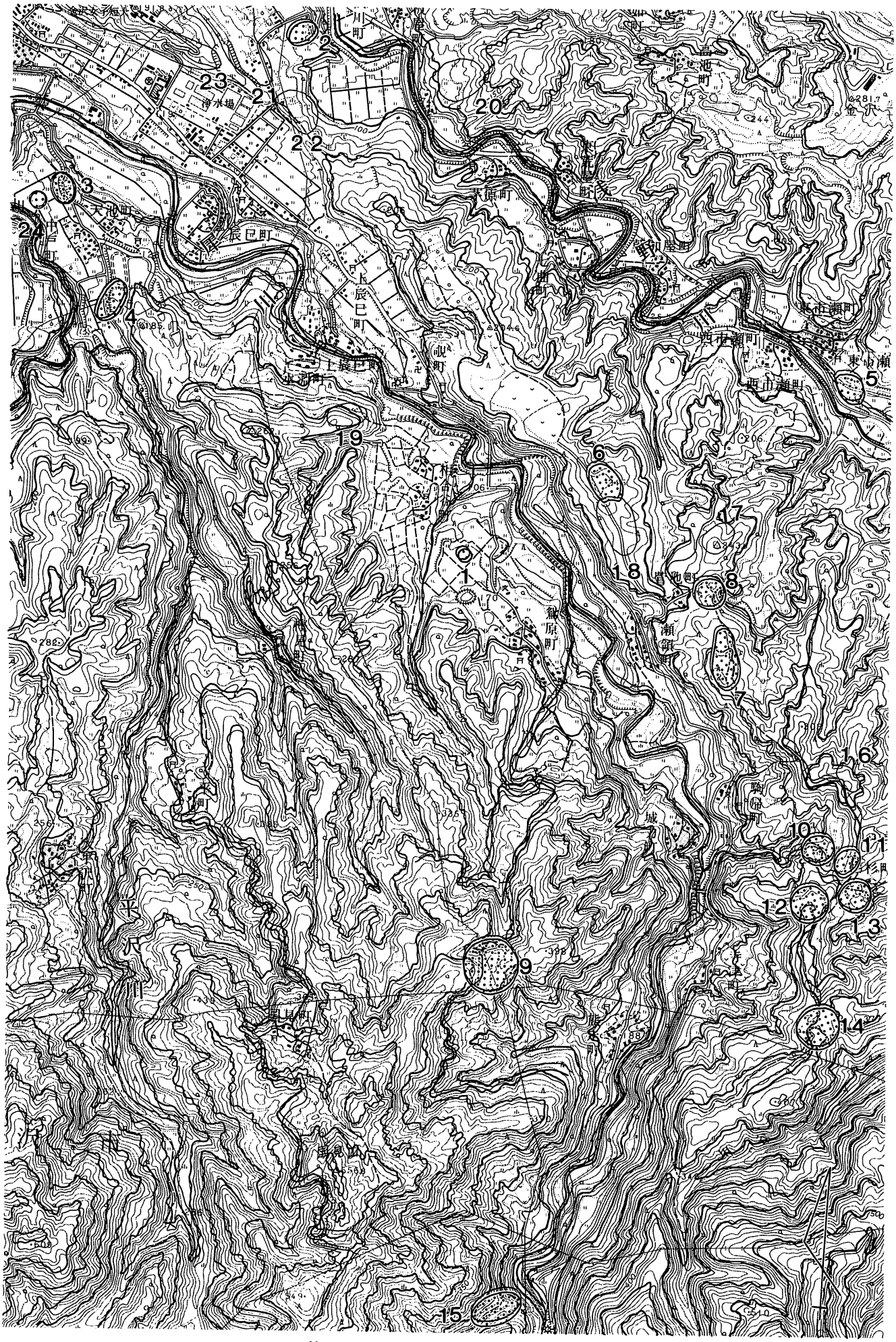
平成２年12月27日付け金土木第717号で依頼のあった箇所について、埋蔵文化財分布調査を、平成４年７月６日に当センター企画調整課福島正実・中屋克彦両氏が行った。約10,000㎡の調査が実施され、側点No21からNo23付近にかけて（第２図　No X～No Z）黒褐色粘質土及び暗褐色粘質



第１図　遺跡の位置



第２図　試掘土層と試掘位置図（S=1/1,000）



第3図　周辺の遺跡（S=1/25,000）

第1表　周辺の縄文遺跡

No	遺跡No	遺　跡　名	所　在　所	種　別	時　代	出土遺物
1	01027	下鴛原遺跡	金沢市下鴛原町	集落跡	縄文	土器、打製石斧、石匙 近世、磨製石斧、石鏃
3	01171	中戸遺跡	金沢市中戸町	散布地	縄文前	土器、有舌尖頭器、凹石
4	01172	天池遺跡	金沢市中戸町	散布地	縄文早	土器、石器
2	01175	上辰巳遺跡	金沢市上辰巳町	散布地	縄文	土器
	01014	鴛原遺跡	金沢市鴛原町	集落跡	縄文	土器、石器
15	01015	熊走遺跡	金沢市熊走町	散布地	縄文	磨製石斧
14	01016	娚杉A遺跡	金沢市娚杉町	散布地	縄文	土器、打製石斧、石錘 磨製石斧、石鏃
12	01017	娚杉B遺跡	金沢市娚杉町	散布地	縄文	
13	01018	娚杉C遺跡	金沢市娚杉町	散布地	縄文	
11	01019	娚杉D遺跡	金沢市娚杉町	散布地	縄文	
10	01020	娚杉E遺跡	金沢市娚杉町	散布地	縄文	
7	01022	菅池A遺跡	金沢市菅池町	散布地	縄文	土器
8	01023	菅池B遺跡	金沢市菅池町	散布地	縄文	土器
6	01026	瀬領遺跡	金沢市瀬領町	集落跡	縄文	土器、打製石斧、石匙 磨製石斧、石鏃
5	01029	東市瀬遺跡	金沢市東市瀬町	集落跡	縄文中	土器、打製石斧、石匙 磨製石斧、石鏃
24		中戸B遺跡	金沢市中戸町	散布地	縄文前	土器

第2表　周辺の遺跡

No	遺跡No	遺　跡　名	所　在　地	種　別	時　代	出土遺物
16	01021	狐塚堡跡	金沢市鈴見町	堡跡	安土桃山	
17	01024				旧石器	
18	01025	鷹巣城跡	金沢市瀬領町	城跡	安土桃山	
19	01028	相合谷城跡	金沢市相合谷町	城跡	不詳	
20	01174	寺屋敷跡	金沢市袋板屋町	館跡	不詳	
21	01176	浅川1号窯跡	金沢市浅川町	窯跡	奈良・平安	須恵器
		浅川2号窯跡	金沢市浅川町	窯跡	奈良	須恵器
		浅川3号窯跡	金沢市浅川町	窯跡	奈良	須恵器、鳥形土製品、 獣脚、瓦、硯
		浅川4号窯跡	金沢市浅川町	窯跡	奈良	須恵器（甕、瓶、杯）
		浅川5号窯跡	金沢市浅川町	窯跡	奈良・平安	須恵器（杯）、瓦
		浅川6号窯跡	金沢市浅川町	窯跡	平安	須恵器
22	01177	辰巳1号窯跡	金沢市辰巳町	窯跡	奈良	須恵器
		辰巳2号窯跡	金沢市辰巳町	窯跡	奈良	須恵器（甕、瓶、杯）
		辰巳3号窯跡	金沢市辰巳町	窯跡	奈良	須恵器
23	01178	末1号窯跡	金沢市末町	窯跡	平安	須恵器
		末2号窯跡	金沢市末町	窯跡	平安	須恵器、鳥形土製品
		末3号窯跡	金沢市末町	窯跡	平安	須恵器

土中の及び整地土中に縄文包含層が確認された。平成４年７月21日付け埋文205号で回答をした。協議の結果約600㎡について緊急発掘調査を実施することとなった。平成５年９月13日付け金土木第965号で文化庁長官あてに、また同日センター宛に埋蔵文化財発掘調査について（依頼）の文書を受け、平成５年10月18日付け埋文第654号で埋文センターが発掘通知を行い、平成５年11月１日より平成６年１月20日までの現地発掘調査が行われた。

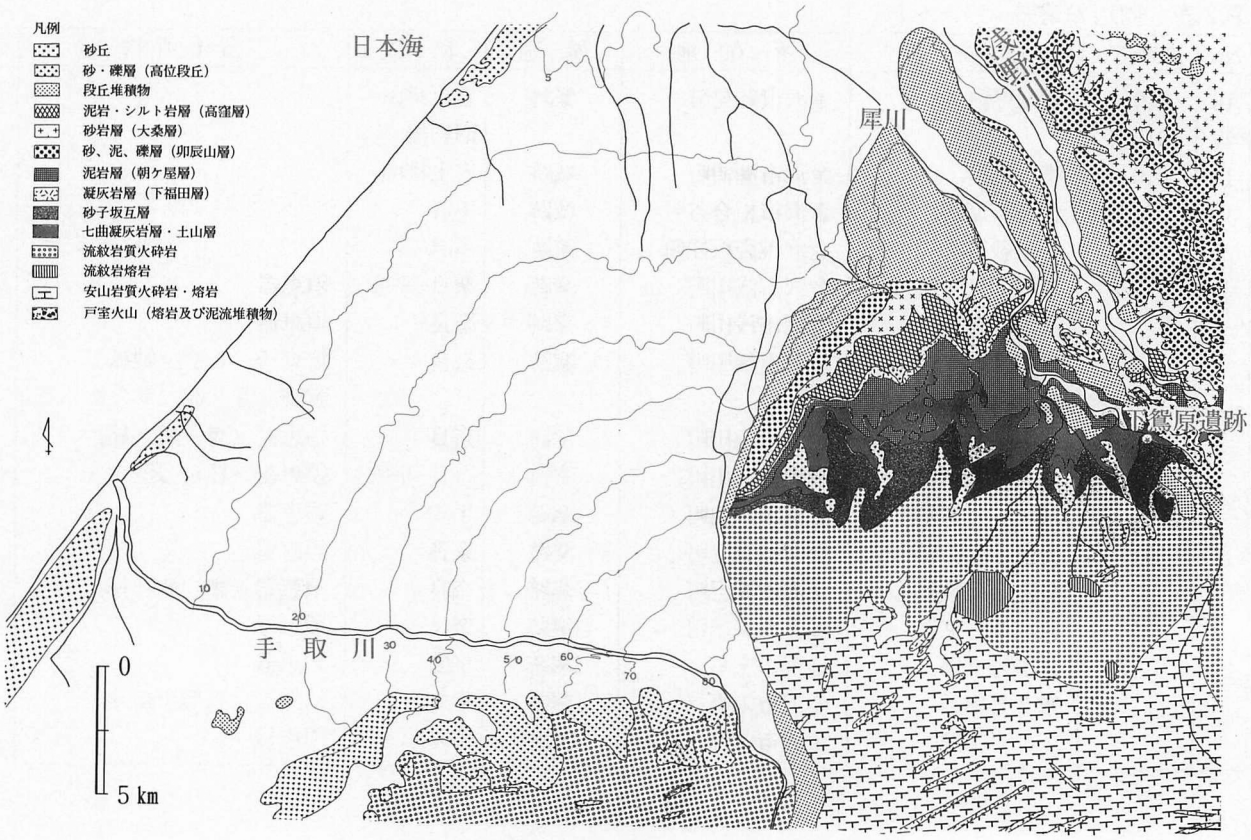
第２節　調査の経過

現地発掘調査の範囲は、当初試掘調査の結果から600㎡と試算されたが、緩斜面東に工事中土器が採集されたため拡張することとなり、最終的には800㎡が発掘調査された。平成５年11月１日より調査が行われ、現地説明会を経て平成６年１月20日に調査は終了した。実働31日の現地発掘調査であった。

作業日誌抄

平成５年

11月１日(月)曇り　重機による表土はぎ。
　８日(火)晴れ　掘り下げ開始。東壁分層し包含層掘り下げ。
　10日(水)晴れ　グリッド杭打ち始める。
　15日(月)晴れ　グリッド杭打ち完了。
　19日(金)曇り　東壁断面図作成。Ｅ層掘り下げ継続中。
　26日(金)晴れ　東壁断面図完成。
　29日(月)晴れ　平板図完成。北壁分層完了。
　30日(火)晴れ　北壁断面図作成。Ａ区遺構掘り下げ。
12月２日(木)晴れ　風倒木痕掘り下げ開始。
　７日(火)晴れ　ラジコンヘリにより航空写真撮影。
　８日(水)晴れ　Ａ区平面図作成。
　13日(月)雨　Ａ区レベル記入。
　14日(火)雨　Ａ区レベル記入完了。
　16日(木)晴れ　備品等撤収。
　18日(土)雪　現地説明会。
１月20日(木)雪　現地調査終了。



第４図　下鶯原周辺の地形（S=1/20,000）

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

下鴛原ナカダン遺跡は、石川県金沢市下鴛原地内に立地する縄文時代・近世の遺跡である。

石川県は、本州のほぼ中央に位置し、北と西を日本海と接し南と東は、福井県・岐阜県・富山県とに接する。県庁所在地である金沢市は、北緯36度33分東経136度40分に所在し、近隣には野々市町・松任市・内灘町・津幡町があり、これらの市町村に接する。

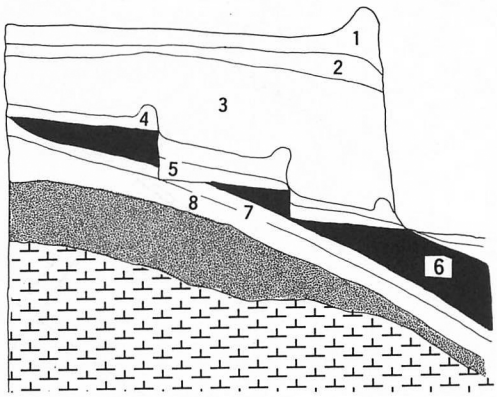
県南部に北東から南西に連なる両白山地の主峰である白山は日本三名山に数えられ、全国各地に存在する白山神社山岳信仰の霊場として、現在も崇敬されている。この両白山地に源を発する河川に大聖寺川・梯川・手取川・犀川などがあり、なかでも手取川は、鶴来町を扇頂として金沢平野の扇状地を形成している。２級河川犀川も一翼を担って複合扇状地を形成している。

金沢市は、日本海に面し西より、内灘砂丘・金沢平野・数々の段丘・宝達丘陵と東高西低の地勢を持っており、手取川・犀川・浅野川により段丘・平野が形成されている。

下鴛原町は、金沢市の南東部、犀川の上流西岸に位置する、日本海の汀線から南東に約17km、平成10年に移転の中戸町新埋蔵文化財センターからは南東約1.5kmに位置する。瀬領町が犀川の対岸に、東方には鴛原町が存在し、鴛原町の分村と考えられる。本町はかつて当地に鴛のすむ池が有ったことからこの地名になったと伝えている。本遺跡は、富樫山地と小立野段丘の隣接点にあたり、覗・相合谷橋等犀川の蛇行する湾曲部を眼下に臨む緩斜面上、標高約161.5～167.5ｍに所在する。

第２節　歴史的環境

当下鴛原遺跡の周辺は、犀川・浅野川が形成した河川敷や段丘上、標高100ｍ～300ｍにかけて数多くの縄文遺跡が点在する。標高110ｍの中戸遺跡（３）では昭和45年（1970年）の調査では微隆起線文、鋸歯状印刻文、結節状浮線文を施した前期中葉蜆ケ森式から前期後葉の福浦上層式縄文土器が出土している。平成７年（1997年）当センターの調査では、有舌尖頭器及び前期の条痕文系の縄文土器の出土をみている。また、中戸Ｂ(24)遺跡からも、縄文前期の土器の散布が認められた。瀬領遺跡（６）は標高約150ｍに所在し昭和43年（1968）林道新設に際して、踏査が行われ縄文中期の土器が橋本・吉岡両氏に採集され集落跡として確認されている。また娚杉Ａ遺跡（14）は、昭和49年（1970）金沢市の調査で80×70cmの方形の石組炉が、E－13°－Sの主軸方向で検出されており、出土土器から縄文中期後葉から後期前葉にかけての遺跡と推定される。東市瀬遺跡（５）は、浅野川とその支流岩谷川に挟まれた河川段丘上標高108ｍに位置し、昭和58年（1983）金沢市教委の調査により、住居跡30棟以上、炉跡も含めると50棟を越える集落跡であることが確認されている。近

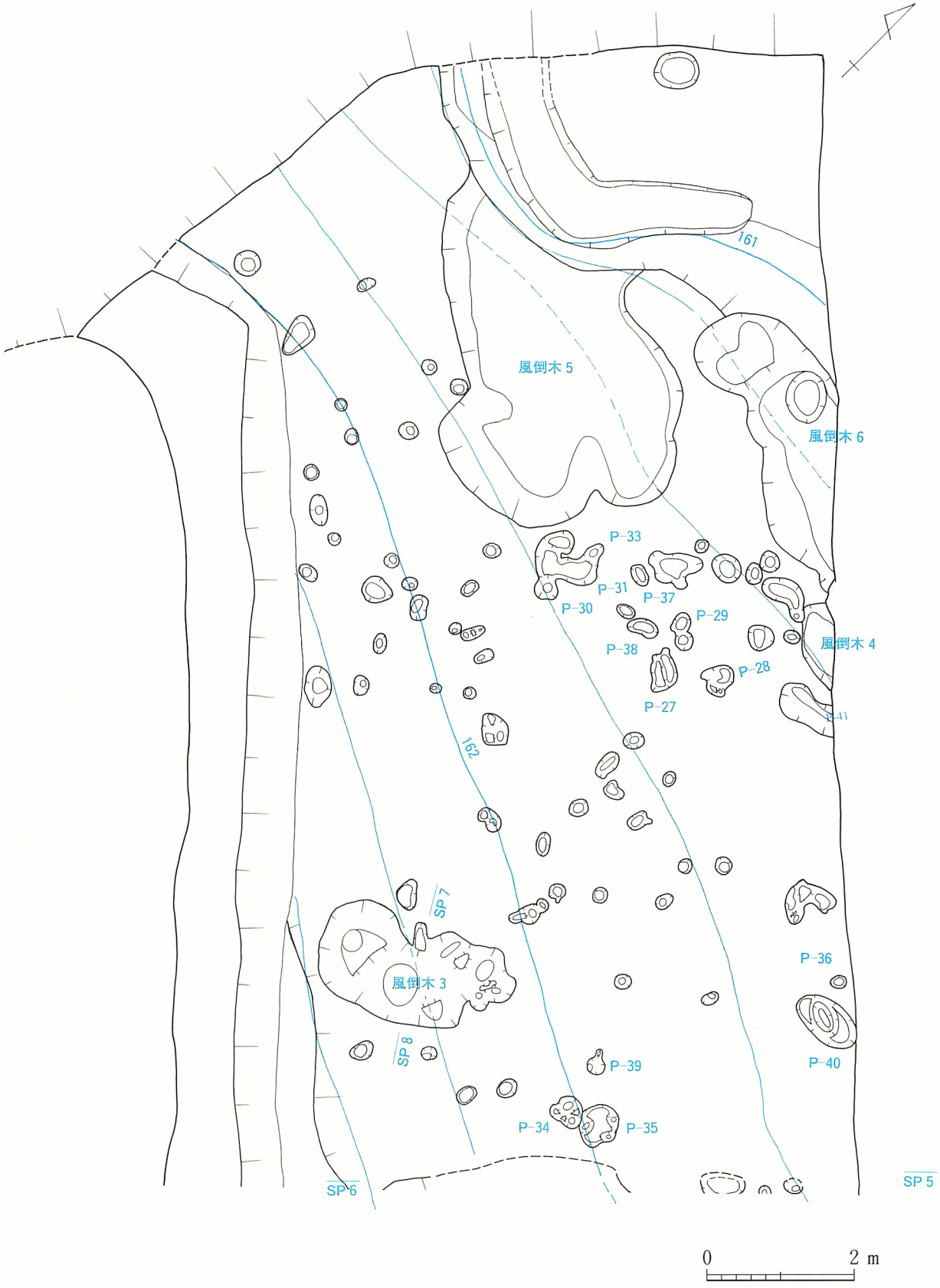


基本土層

１層	明灰シルト（現耕土）	Aa
２層	明灰シルト（現床土）	Ab
３層	暗灰シルト（盛土）	B
４層	灰色シルト（旧耕土）	C
５層	暗褐色シルト	D
６層	黒褐色シルト質（包含層）	E
７層	赤黒褐色シルト	F
８層	赤褐色粘土	G

第５図　基本土層略図

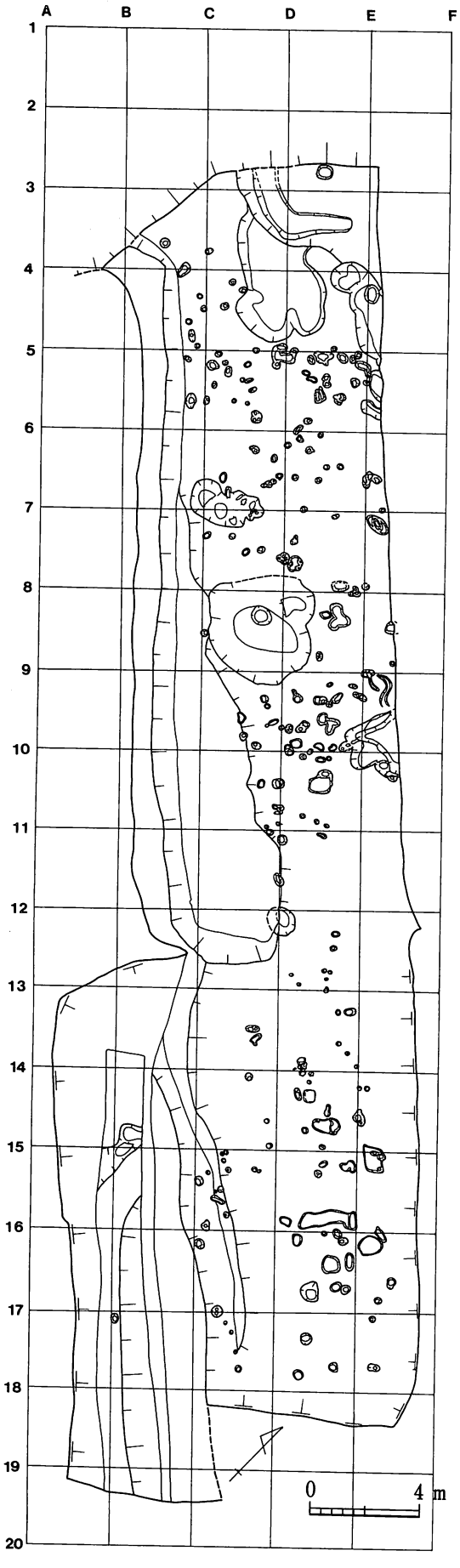
第６図　調査区位置図（S=1/15,000）



第７図　調査区平面図Ⅰ（S=1/80）

第８図　調査区平面図Ⅱ（S=1/80）

第９図　調査区平面図Ⅲ（S=1/80）



第10図　調査区グリッド図（S=1/240）

隣には金沢市末窯跡群（21・22・23）が所在し、浅川窯跡からは平城宮式均整唐草の軒平瓦が1960年代に表採されており、平成８年・平成９年の金沢市教育委員会の行った広坂遺跡の発掘調査で出土した100ケース以上の瓦のなかに、前述の表採瓦当並びに凸面に縦の叩きが見られる布目瓦の出土が確認されている。平城宮式6666型の瓦であり、郡司氏族の狭域圏窯業ではあるが、中央政府の支配の波及の一旦が覗かれる。

（　）内の番号は第１表、第２表の表中の番号と一致する。

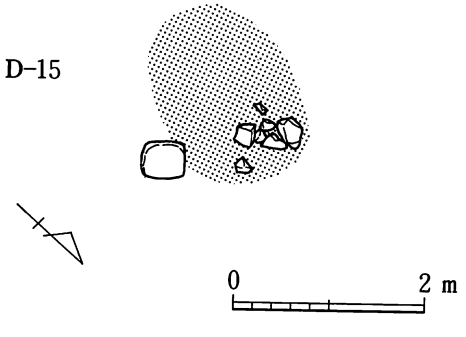
＜参考文献＞
森田平次　1969『加賀志徴』復刻版 石川県図書館協会
若林喜三郎他　1991『石川県の地名』平凡社
出越茂和他　1989『金沢市末窯跡群』金沢市文化財紀要76金沢市教育委員会

第３章　遺　　構

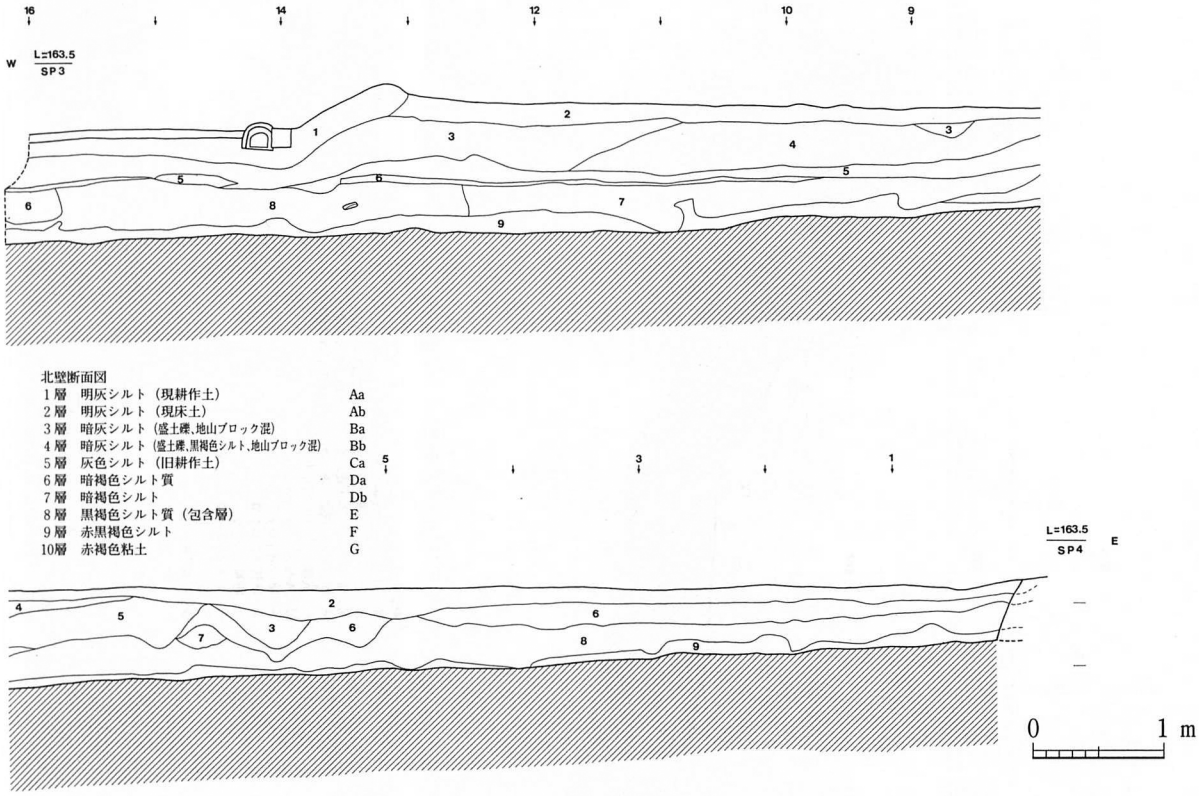
第１節　調査区の位置と地区割り

発掘調査地点は、古語の山ゆりを意味する「佐韋」より名を転じたともいう犀川の河岸段丘上標高約160ｍから170ｍに立地する遺跡である。敷設予定の340号上辰巳・熊走線は緩斜面に敷設する路線であり、調査区も緩斜面に道路線形に沿った緩い曲線を描く傾斜した調査区となった。重機により表土、現耕作土、盛り土、旧耕作土を除去した後、手堀りで調査を行った。

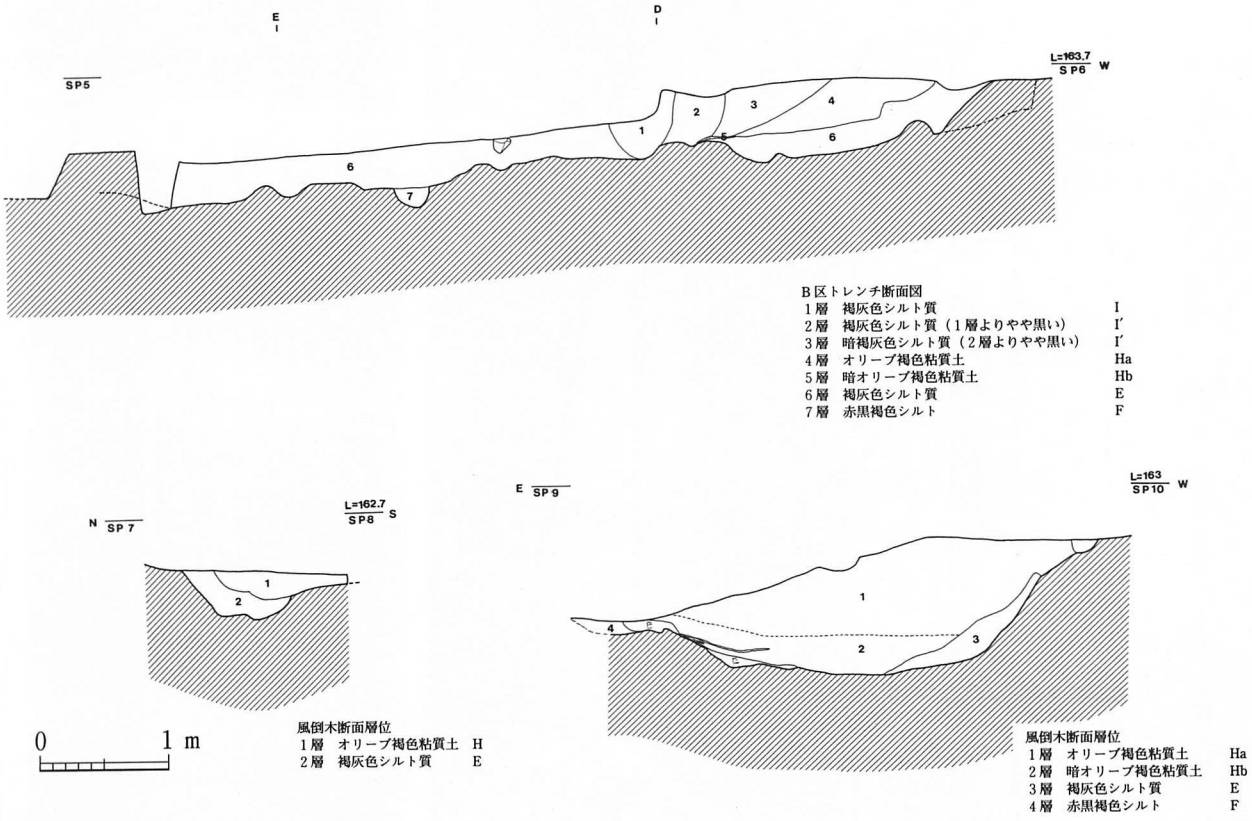
調査区割りは、調査区線形にあわせて任意に３ｍ×３ｍのグリッドを設定した。北から南へ数字の１から18、西から東はアルファベットＡからＥをふった。北西方向の杭名をグリッド名とした。



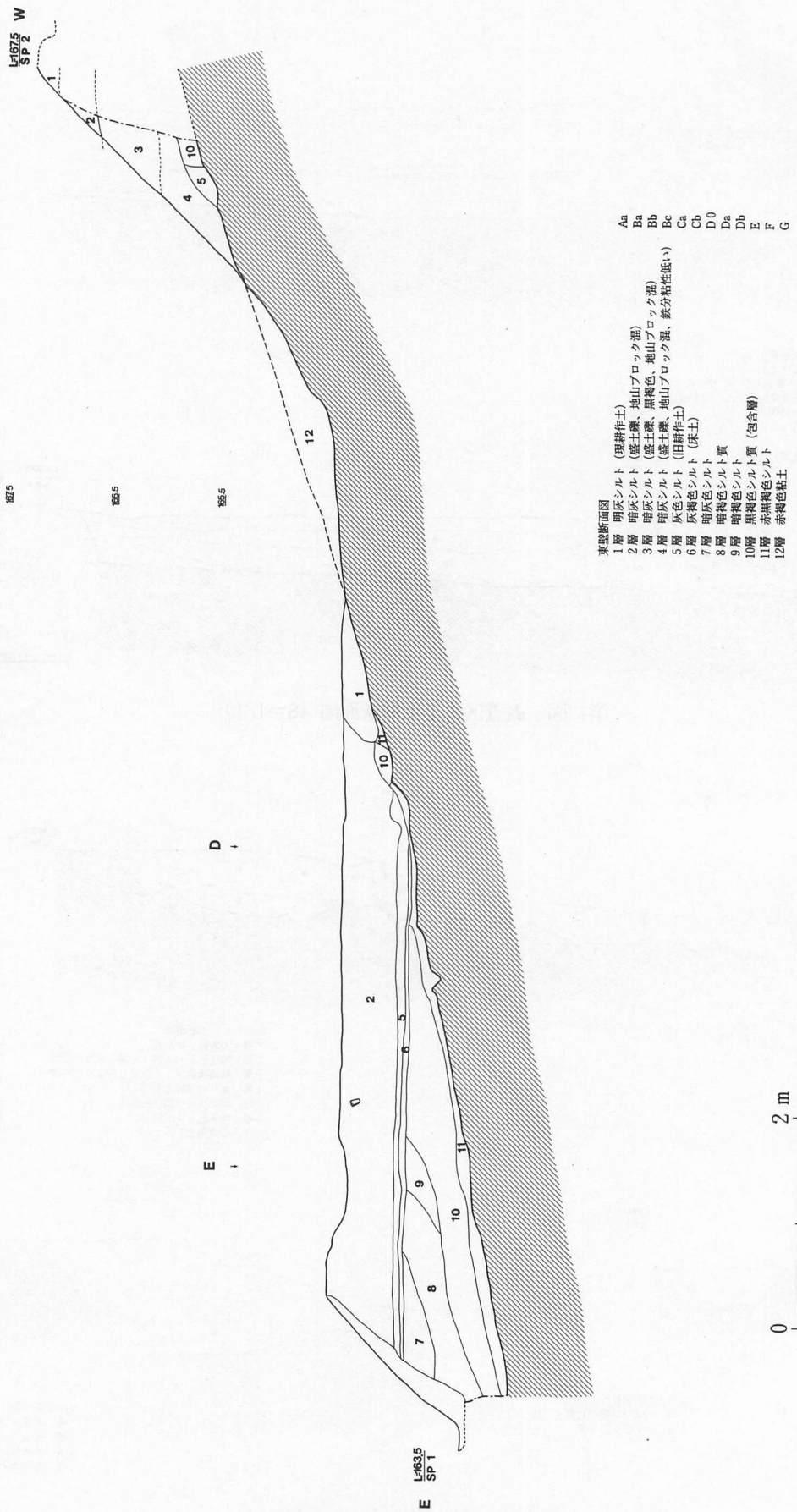
第11図　集石遺構（S=1/40）



第12図　調査区北壁土層断面図（S=1/40）



第13図　風倒木断面図（S=1/40）



第14図　調査区東壁断面図（S=1/60）

第２節　基本土層（第５図）

調査区は水田耕作がされていた地所であり、段丘状の緩斜面の数次に及ぶ造成により棚田状の景観を呈していた。現在の耕作土及び床土の下層には、近世の遺物を含む盛り土を持つことが、確認されていた。

基本層序は第10図に示す通りである。Ａ層は、現耕作と床土からなっている。Ｂ層は、現在の田面を造成するため等の明治から昭和にかけての盛り土である。Ｃ層は江戸期の耕作土及び床土である。Ｄ層は、自然堆積層である。Ｅ層は縄文中期から後期の包含層。Ｈ層は、風倒木により作られた攪乱層。Ｆ層は地山層Ｇ層とＥ層との漸移層である。もっとも人為活動が盛んであった時期はＥ層であり、他の時期は人間活動が希薄であったと認められた。

第３節　遺構

・集石遺構（第11図）

調査Ａ区Ｃ・Ｄ－13区、Ｃ・Ｄ－14区に約２㎡にわたり、集石を確認した。この　Ｃ・Ｄ－13区、Ｃ・Ｄ－14区はＡ区の中で一番の土器の集中出土区の中にあり、石器および川原石も数多く出土した。掘り進むうちに、石の集中出土状況から、立ち割りを入れて確認するとＦ・Ｇ層（地山層）にまで到達する集石であることがわかった。掘り方や、Ｅ層中の広がりの確認も遅かったため性格は不明である。残存した堅固な集石部分のみ図化した。

・風倒木痕（第14図）

調査地点のＡ区、Ｂ区、東拡張区を合わせると大小７個の風倒木痕が確認された。平面状は不定形なものもあれば、ほぼ円形のものもあり、断面は第14図に示す通りである。

Ｂ区中の土器の集中出土は、風倒木２付近に見られたため当初遺構の可能性もあると、断面観察をしながら掘り進んだが、確認できなかった。Ｅ層上層に見まがうＩＩ′Ⅱ″層は、土質もほぼＥ層と同様であり、土色からもＥ層と同質と判断できる。Ｈ層は、倒木の際にできたくぼみに新たに、形成された自然堆積層であり、ＩＩ′Ⅱ″層は遺物を巻き込んでおしだされて形成された層序と推定される。

・ピット

土器包含層のＥ層上面は、全面黒褐色の検出面であり、縄文土器及び、石器を含む調査区であった。Ｅ層を精査する内に径15㎝ほどの数個のピットを確認した。遺物を包含するもののみ遺構番号を付加した。Ａ区集石遺構付近では遺構の可能性ありと精査したが、不定形な配列であり、炉跡・プラン等確認するに至らなかった。調査区内でも縄文土器、石器の集中して出土する区域であり、付近に住居のあった可能性を払拭できない。

図化してないが現水田で使用されているはさ穴様の径10㎝弱の小穴も多数確認した。

第4章　遺　　物

下鴛原ナカダン遺跡から出土した遺物は、土器・陶磁器・石器・石製品類・自然遺物に大別できる。その遺物の時代の内訳は縄文時代の遺物と近世・近代の遺物である。遺物の図化については、厳選した。

出土遺物はパンケース17箱である。調査に際し多数の石の出土をみたため現地で石を選別取捨選択した。石器については、担当者の力量不足のため石器の認識なしに廃棄した可能性もある。時代を追って記述を進める。

第1節　縄文時代の出土遺物

1、縄文土器

本遺跡の当調査では、コンテナパンケース9箱の縄文土器の出土をみた。細破片が多く、土質のためか依存度は悪い。土器外面の磨耗も進むものが多く、拓本で明瞭な施文方法の判別の出来ないものもみられた。可能な限り復元を試みたが器形の復元できるものはなかった。また、いわゆる粗製土器にあたるものが多かった。遺構に伴う遺物がみられないため、全調査区の縄文土器を包含層であるE層を中心に属性を1、施文方法2、部位（器種）として整理した。1・2の属性により分類を試みた。

（1）分類

文様

Ⅰ類　隆帯上および脇に刺突・条痕・撚り糸を施文するもの

Ⅱ類　隆帯を持たず沈線・刺突・条痕・撚り糸を施文するもの

Ⅲ類　肋状に縦の隆帯をもつもの

Ⅳ類　磨り消し縄文を施文（充填）するもの

Ⅴ類　無文・縄文のみのもの

器種

平縁の口縁を持つ深鉢	a
波状口縁を持つ深鉢	b
浅鉢	c1
台付き鉢	c2
壷型土器	d

Ⅰ－a（図15－1）

蛇行する隆帯を持ち隆帯上半部に爪形文を施文し、隆帯下部より平行な条痕を施文する深鉢。

Ⅰ－b（図15・16－3・5・6・7・9・13・17）

5は、外反する波状口縁を持ち隆帯下半部より、条痕を施文する。3は隆帯下半部に爪形文を施文し、胴部には交叉する条痕文を施す。土器内面部にも隆帯状の支えを貼り付ける手法は、11も同様である。曲線を描く隆帯をもち、上及び脇に刺突を持つ6・9・13は右近次郎遺跡12群[(1)]に比定できる深鉢であろう。17は貝殻腹縁を刺突具とした深鉢である。

Ⅰ－d（図16－24）

内湾する口縁は、波状に屈曲している。撚り糸を施文した後口縁の曲線に平行して、隆帯と沈線が引かれる。上弦の弧を2条に引き、鱗状に配列させている。

Ⅰ－e？（図15－15）

ほぼ垂直に立ち上がる口縁（鍔状の部分）は丹念に形成されている。隆帯脇に把っ手の痕跡が残る。胴

部がそろばん型を呈する小型壷と推定される。

Ⅱ－a（図16－25・26）

外反する口縁は、平縁を呈し数条の沈線を施す。25は断面観察から、巻き上げている粘土紐は、約1㎝である。先にRLの縄文施文のあと沈線を引いている。26は、2条目からは、沈線内に押し引きの作意が働く。

Ⅱ－b（図15－2・12）

2は、外反する口縁に小波頭を持ち、口縁下に2条の沈線とその間に短沈線を施文する深鉢で、胴部には交差する条痕を縦に施文する。12は、曲線を描く沈線間に不定形の刺突を施文する深鉢。

Ⅲ－b（図16－31）

縦の隆帯脇には、鋭角的に蛇行する沈線が付随する。

Ⅳ－b（図16－23）

肥厚が口縁部の内面にみとめられ、口縁に沿って2条の沈線が施文され沈線間に縄文が充填されている。口縁形態不明の胴部破片も多く出土したが、分類に入れなかった。円盤状土製品も数個確認できたが、未掲載である。

2、縄文時代の石器

本遺跡出土の石器は、パンケース7箱に上りほぼ縄文時代の遺物の半数を占める量である。確認できた石器は、197点にのぼった。石器は、磨製石斧・打製石斧・石錘・砥石・石鏃類・擦り石類・石皿等が確認された。いずれも縄文土器と同じ層位E層からの出土である。遺存状態の良いものを中心に図化したが、図化できなかったものについては計測・石質鑑定のみを行った。

・磨製石斧は、8点の出土である。破損のないものは無かった。ほぼ完形は大型の1点（図18－1）のみであった。

・打製石斧は14点の出土である。いずれも使用頻度が高く破損している幅により、大（図18－5・7・6）、中（図18－9・10）小（図化なし）に分けられる。

・石皿は、3点出土している。土器集中区のD－14区より3点の出土であるが、全て欠損している。

・擦石類は、本調査で一番多数の出土をみた（28点）。機能の転用の最たる石器で、擦る、敲く、凹む、の重複がほとんどの石器に見られたため、一括した。

・石錘は、切り目石錘・打欠き石錘の両者があり、剥片を敲き、作り出しているものもみられた。出土、36点。

・石鏃類は、抉りのみられないもの、3点のみの出土であった。（図21－38～40）

・剥片類は、36点の出土である。珪化白色凝灰岩の石器が一番多く、流紋岩質の石器もみられた。

・石核（コア）は、13点出土している。石質の異なる流紋岩質、珪化白色凝灰岩質のものをそれぞれ1点ずつ図化した。（図21－43、22－46）

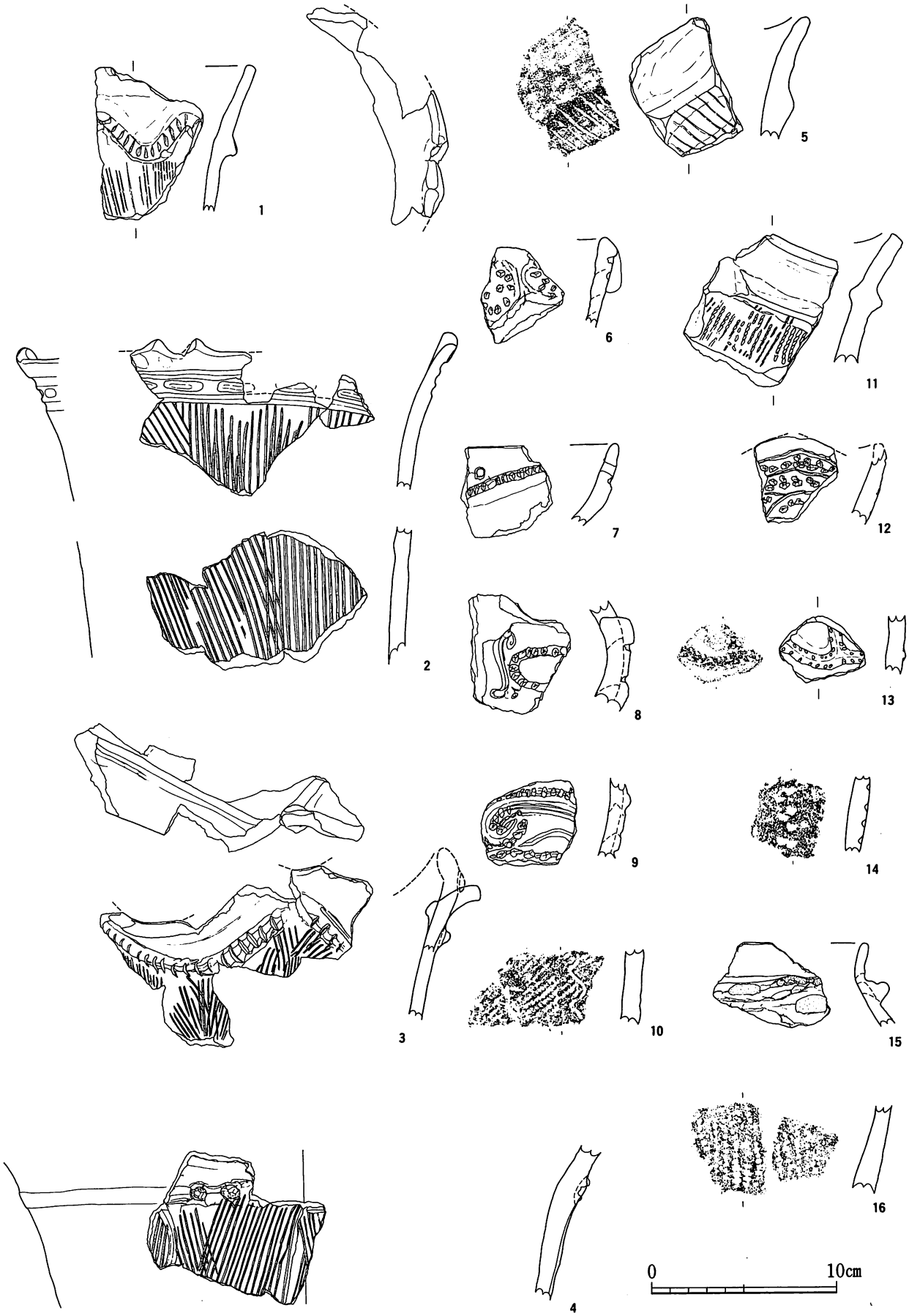
その他の石器　石錐、剥片かと思われるもの数点を計測した。確認できた石器は、147点にのぼった。

土器、石器について、本田秀生氏・布尾和史・宮田明・浅野豊子各氏の教授を得た感謝します。（第5章藤則雄氏と計測数がことなるのは、不明のものも点数に加算しているためである。）

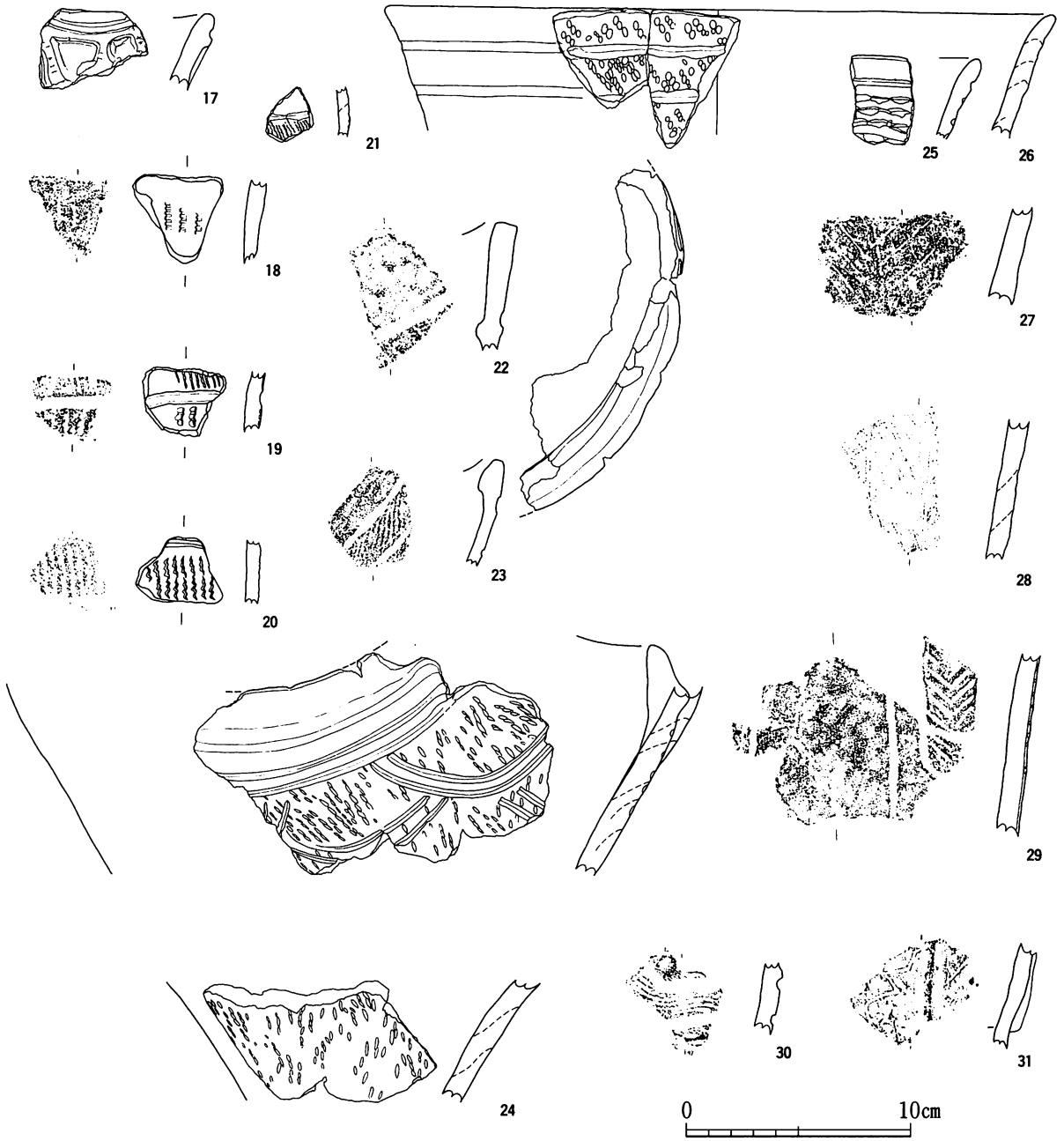
第2節　近世の出土遺物

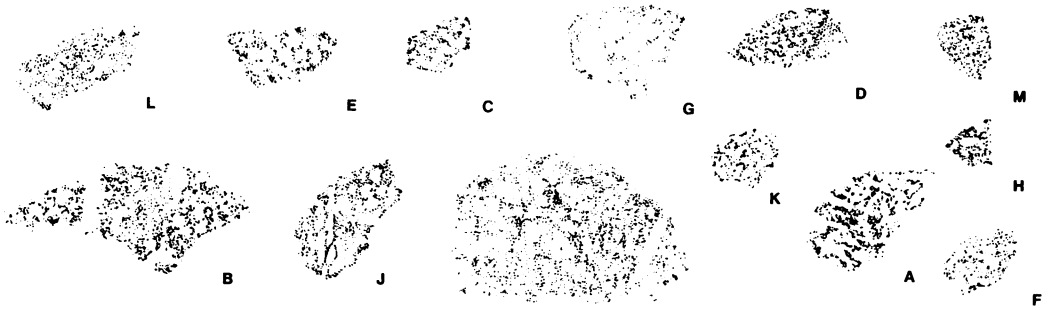
盛り土中より、唐津の擂り鉢の出土をみた。（図17－48）17C前半の擂鉢で、口縁端部が逆三角形に造りだされ、錆釉が帯状にかかる。その他図化しなかったが、肥前陶胎染付、数点の窯不明の陶磁器土器の出土があった。

近世陶磁器については、埋蔵文化財保存協会の滝川重徳氏に御教授を得た。感謝します。

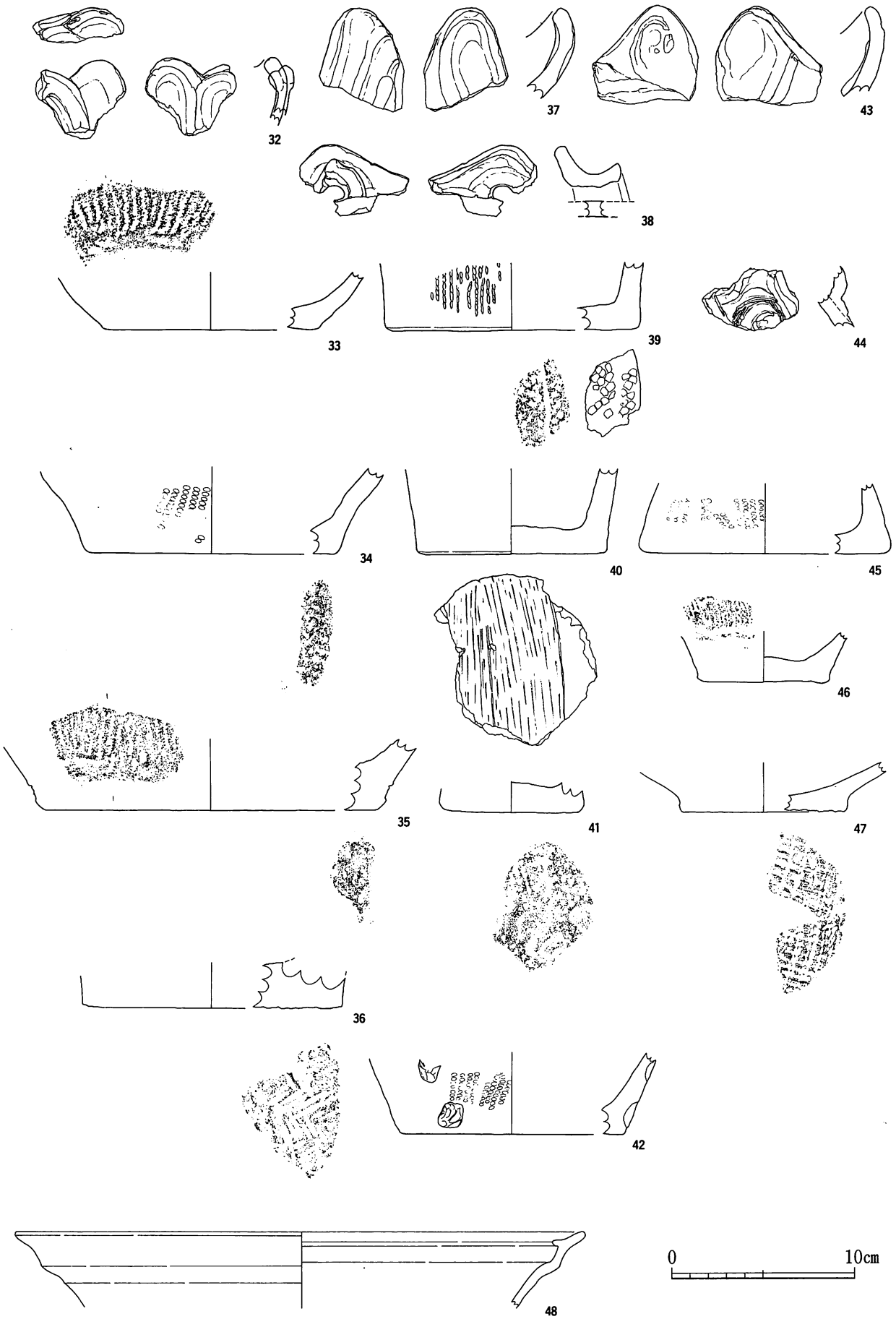


第15図　出土縄文土器第１図（S=1/3）





第16図　出土縄文土器第２図（S=1/3）

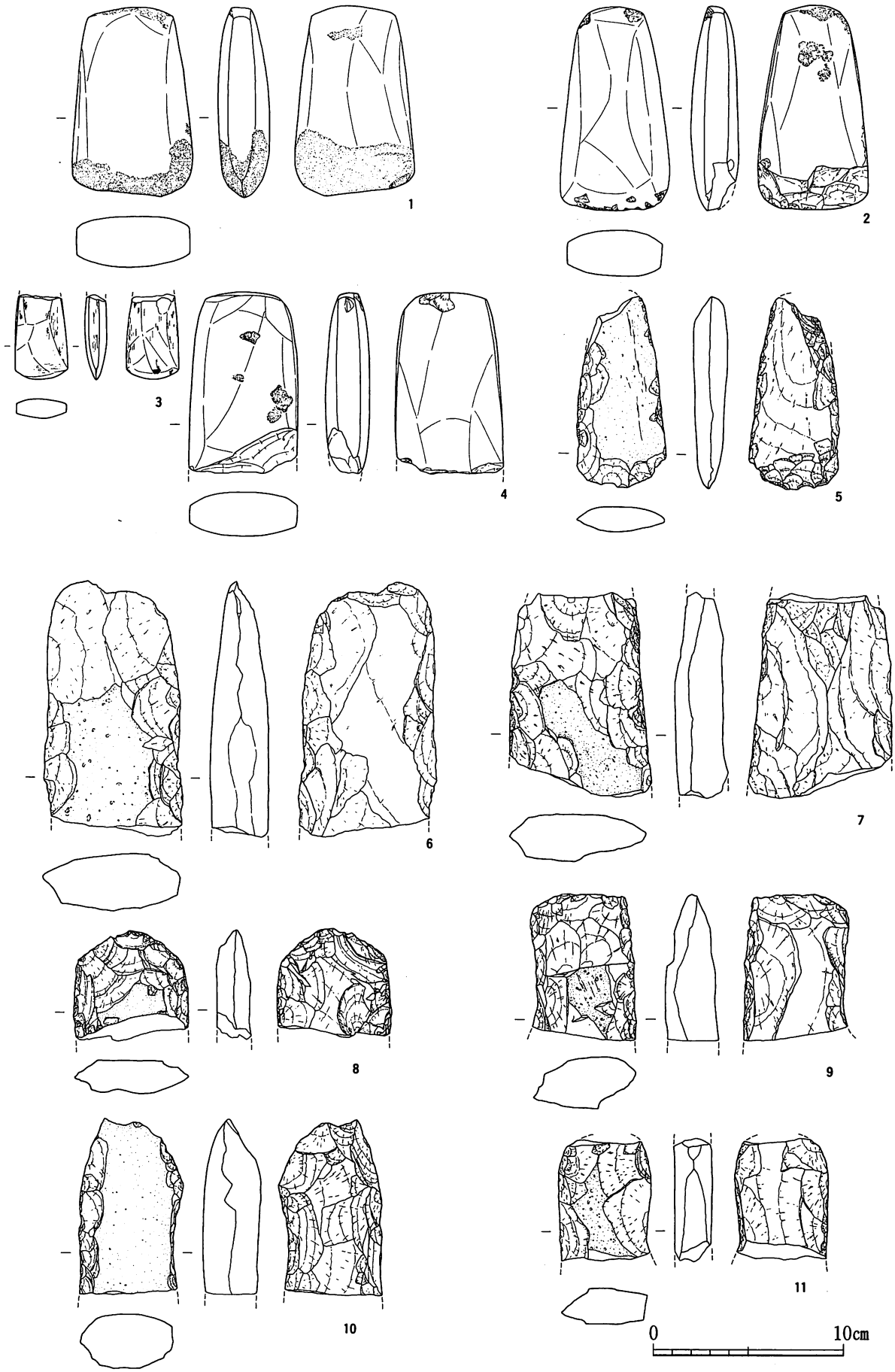


第17図　出土土器第３図（S=1/3）

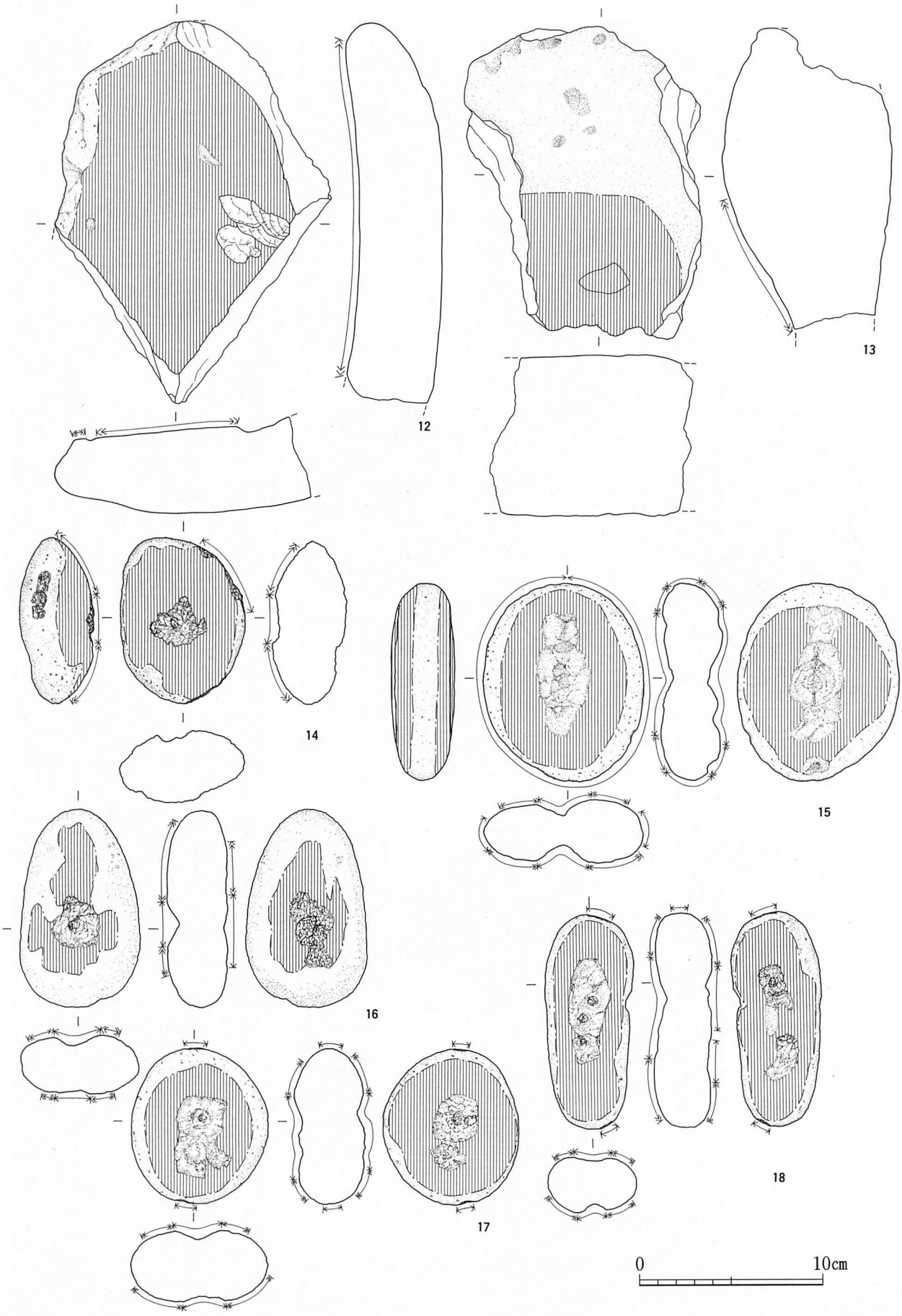
第３表　下鴛原遺跡土器観察表

図No	実No	出土地点	器　類	法　量	色　調	備　　考	遺存度
1	3	C－14　E	深鉢口縁片			微隆帯上刺突	
2	1	D－13　E	深鉢	a：20.8	にぶい橙	二条沈線・刺突	a：1/8
3	4	D－14　E	深鉢口縁片		にぶい橙	微隆帯上刺突	a：1/8
4	2	C－14　E	深鉢		灰褐色	微隆帯上刺突	a：1/8
5	21	C－7　E	深鉢口縁片		にぶい橙	隆帯・条痕	
6	16	D－8　E	深鉢口縁片		橙	刺突	
7	34	D－14　E	深鉢口縁片		にぶい橙	刺突・沈線・補修穴	
8	8	A区　E	深鉢小片		浅黄橙	s字文・沈線内刺突	
9	7	D－15　E	深鉢小片		にぶい橙	隆帯脇刺突	
10	43	C－15　E	深鉢片		にぶい橙	波状沈線・ＲＬ縄文	
11	17	D－9　E	深鉢口縁片		浅黄橙	隆帯・撚り糸	
12	31	D－13　E	深鉢口縁片		にぶい橙	沈線・刺突	
13	14	D－8　E	深鉢口縁片		灰黄褐色	微隆帯上刺突	
14	39	D－17E F	深鉢片		浅黄橙	刺突？	
15	5	D－15　E	壺形土器口縁片		にぶい橙		
16	30	C－13　E	深鉢片		橙	ＲＬ縄文	
17	24	D－8　E	深鉢口縁片		にぶい橙	沈線・貝殻刺突	
18	48	D－9　E	深鉢片		浅黄橙	貝殻圧痕	
19	38	D－9　E	深鉢片		にぶい黄橙	沈線．貝殻圧痕．撚糸	
20	35	D－9　E	鉢片		にぶい橙	沈線・貝殻腹縁	
21	28	D－12　E	鉢片		橙	沈線・貝殻圧痕	
22	37	C－3.4　E	深鉢口縁片		にぶい黄橙	沈線・貝殻圧痕	
23	29	D－10　E	深鉢口縁片		にぶい橙	磨消ＬＲ縄文	
24	6	D－14　E	鉢片		褐色	沈線・撚り糸	
25	23	D－8　E	深鉢口縁片		にぶい橙	沈線	
26	11	東拡張区E	深鉢口縁片	a：30	にぶい橙	縄文・沈線	
27	19	D－7　E	深鉢片		にぶい橙	葉脈	
28	40	D－16　E	深鉢片		にぶい黄橙	葉脈	
29	32	C－14　E	深鉢片		にぶい橙	葉脈	
30	47	D－15　E	深鉢片		にぶい黄橙	磨消	
31	42	D－15　E	深鉢片		にぶい黄橙	隆帯・沈線	
32	22	C－4　E	突起		にぶい橙		
33	13	D－6　E	底部	b：11.8	にぶい橙	縄文	b：1/6
34	12	D－15　F	底部	b：13.9	橙	ＬＲ縄文　網代	b：1/7
35	20	C－7　E	底部	b：18	にぶい橙	ＲＬ縄文　網代	b：1/8
36	10	東拡張区E	底部	b：14.2	灰白色	無文　網代	b：1/5
37	26	D－8　E	突起		にぶい橙		
38	44	C－14　E	突起		にぶい橙		
39	36	A区　E	底部	b：14	赤褐色	ＬＲ縄文　網代	b：1/8
40	33	C－14　E	底部	b：10.5	にぶい橙	笹の葉圧痕	b：4/5
41	45	C－14　E	底部	b：7.3	にぶい橙	網代	b：1/2
42	18	D－7　E	底部	b：12.4	浅黄橙	ＲＬ縄文・刺突？	b：1/6
43	27	F－8　E	突起		浅黄橙		
44	41	C－14　E	深鉢片		橙	沈線	
45	25	D－8　E	底部	b：12.2	橙	ＬＲ縄文	b：1/5
46	15	D－9　E	底部	b：7.2	浅黄橙	撚り糸	b：2/3
47	9	試掘トレンチE	底部	b：8.8	灰黄褐	無文　簾状圧痕	b：1/2
48	46	AB－17/18	鉢	a：31	暗褐色	唐津擂り鉢	

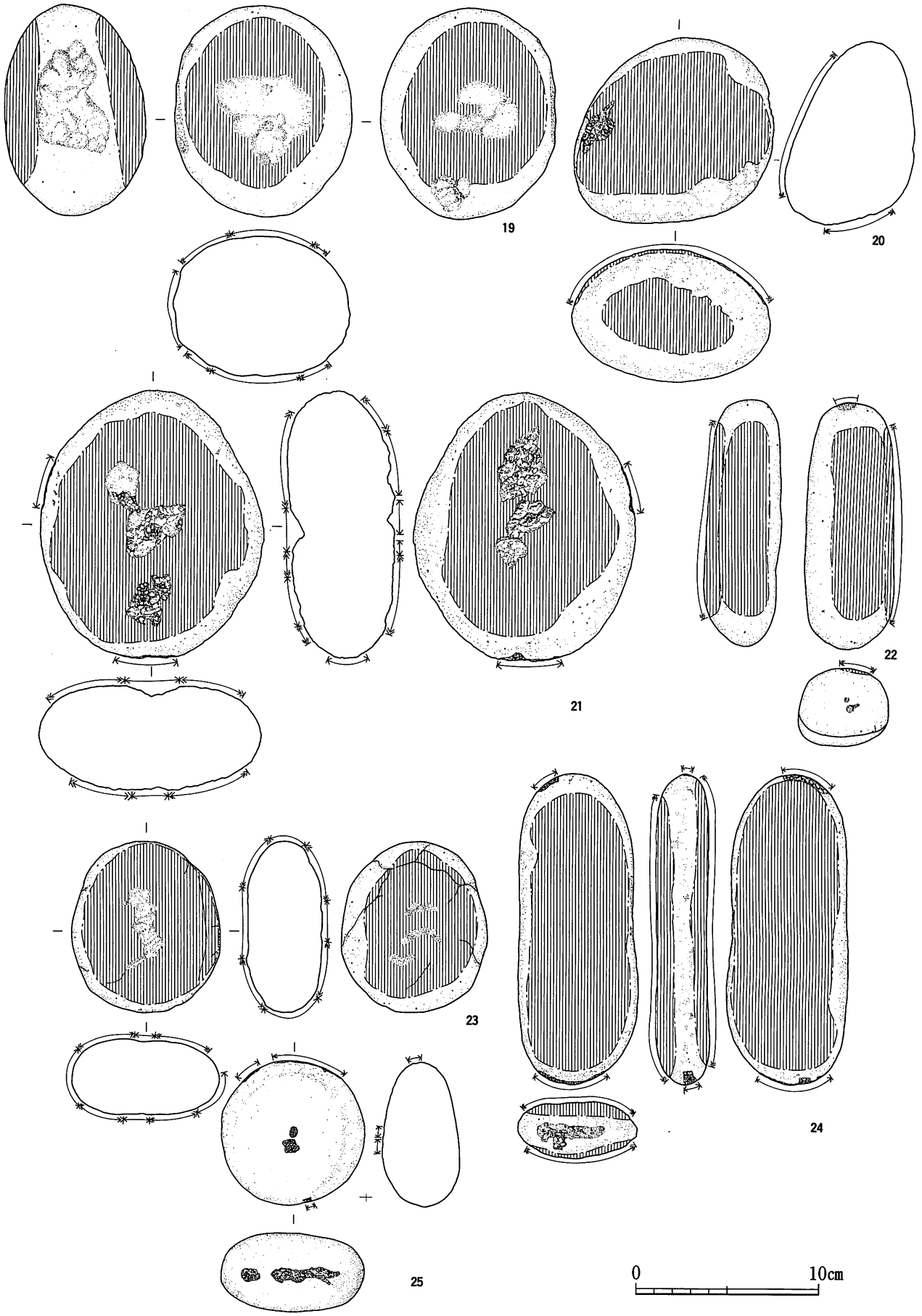
（表中のａは口径・ｂは底径）



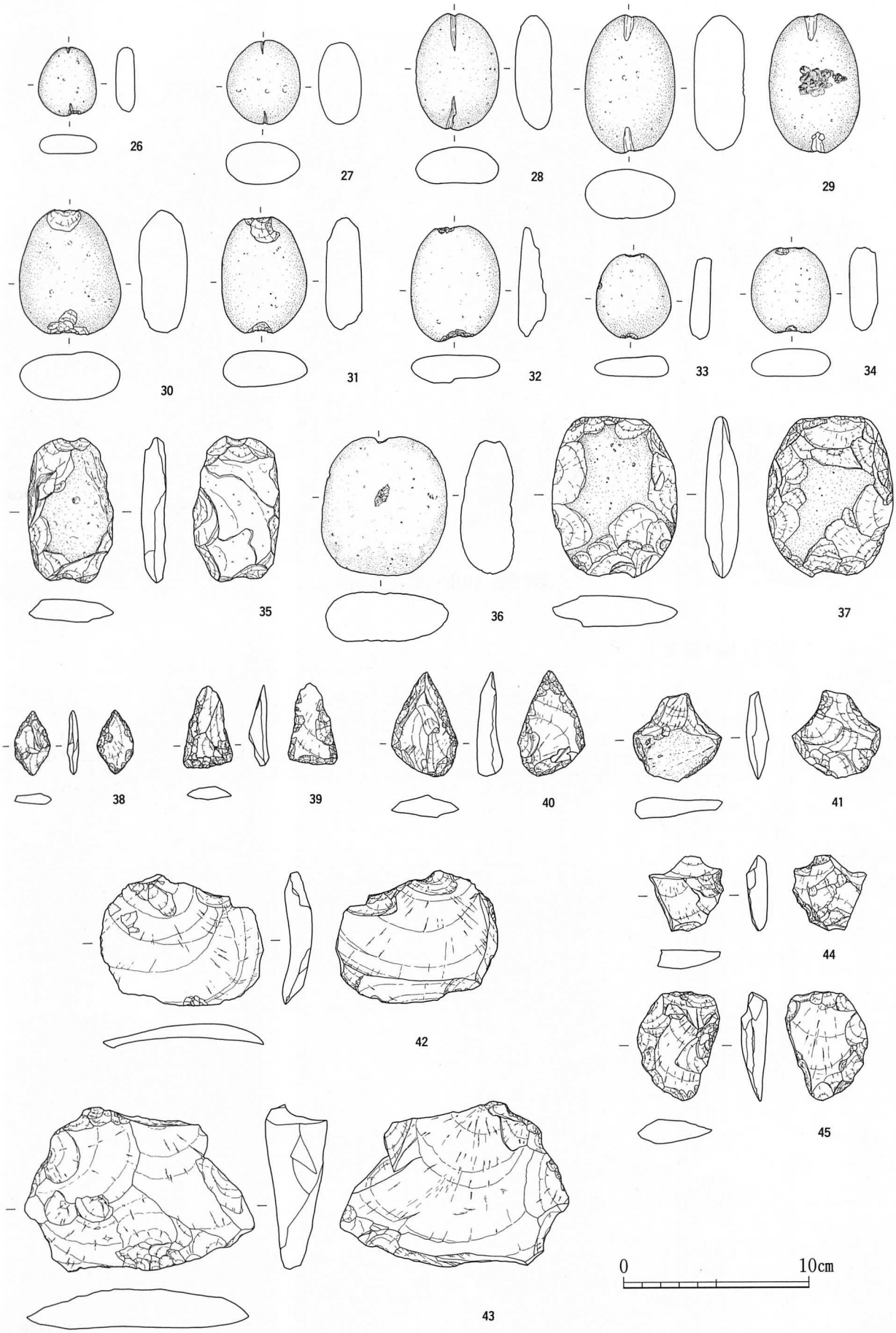
第18図　出土石器１図



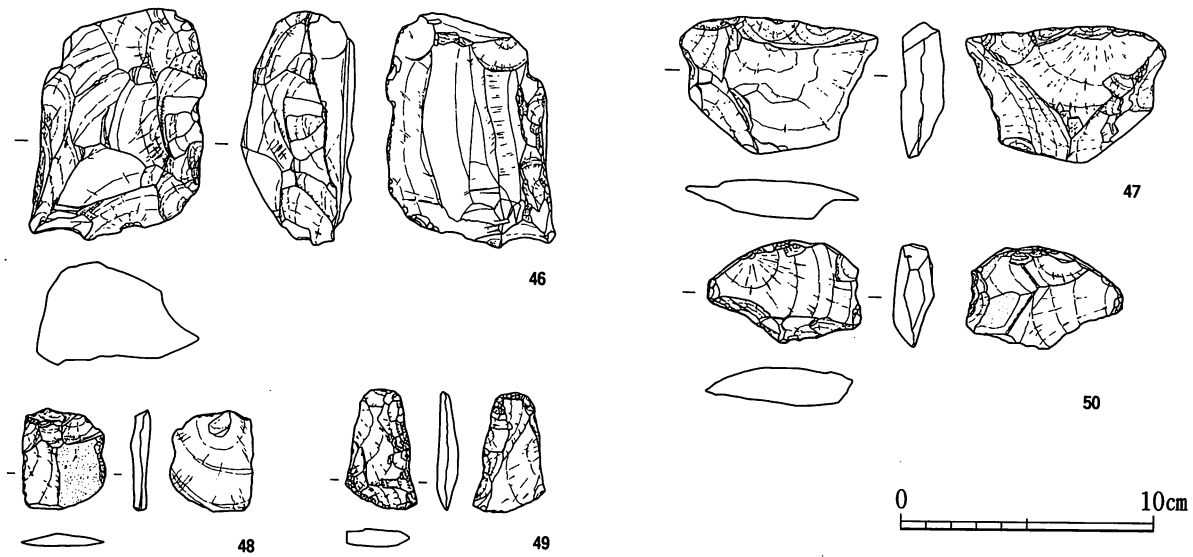
第19図　出土石器２図



第20図　出土石器　第３図



第21図　出土石器　第４図



第22図　出土石器　第５図

第４表　下鴛原石器計測表Ⅰ

①磨製石斧

図 NO	実測 NO	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考	石　質
1	2	D−14	10	6.3	2.7	286	大	緑色凝灰岩
2	3	E−13	(11)	(5.8)	(2.4)	231.3	大	変朽安山岩
3	1	D−9	(4.5)	2.8	1.2	21.6	小	濃飛型流紋岩
4	4	D−18	(9.5)	5.7	2.4	237.2	大	輝緑凝灰岩
	101	E−15	8.1	6.3	2.8	236.5	大	粗粒砂岩
	102	D−10	(3)	(4.8)	(1.3)	14	破片	変朽安山岩
	103	C−7	4	4.6	1.3	26.4	破片	珪質岩
	191	C−8				11	破片	安山岩

②打製石斧

図 NO	実測 NO	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考	石　質
5	11	C−14	(10)	4.7	1.8	89.5		角閃石安山岩
6	6	表採	(13.4)	(7.3)	3.1	348.1		凝灰岩
7	5	C−9	(10.8)	(7.8)	2.5	232.9		凝灰岩
8	7	A区	(5.8)	6	1.8	66.7	刃部	珪化白色凝灰岩
9	9	D−8	(7.7)	(5.4)	(2.7)	136.4		変朽安山岩
10	8	D−8	(9.3)	5.5	3.1	209		変朽安山岩質凝灰岩
11	10	E−15	(6.4)	(4.8)	2	96.6	柄部	輝石安山岩
	104	排土中	(16.2)	8.7	2.8	534.9		緑色凝灰岩
	105	C−7	9.1	5.7	3.5	209		凝灰岩質砂岩
	106	C−14	(8)	5.4	2	105.6		珪化凝灰岩
	107	C−88	(12.3)	5.3	2.5	202.8		輝石角閃石安山岩
	108	D−15	(7.5)	4.2	1.2	40.7		珪化凝灰岩
	109	表採	8.1	6.6	1.5	91.2		流紋岩
	110	D−14	(8.3)	(5)	(2.2)	111		緑色凝灰岩

③石皿

図 NO	実測 NO	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考	石　質
12	12	D−14	20.5	14.7	4.7	1620.9	破片	流紋岩
13	13	D−14	16.6	12.9	9.1	1892.8	破片	火山礫凝灰岩
	111	D−14	21.9	15	6.5	2690	破片	白色凝灰岩

④−１擦石類

図 NO	実測 NO	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考	石　質
14	14	D−14	9	6.8	4.1	251.8	擦凹叩	凝灰岩
15	17	D−10	10.8	8.8	3.5	415	擦凹叩	粗粒砂岩
16	16	A区	10.9	6.6	3.3	247.8	擦凹	白色凝灰岩
17	20	C−14	8.5	7.4	3.9	266.5	擦凹叩	輝石角閃石安山岩
18	19	C−14	11.8	4.8	3.1	230.2	擦凹叩	緑色凝灰岩

第５表　下鴛原石器計測表Ⅱ

図 NO	実測 NO	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さｇ	備考	石　質
19	25	D－9･10	11.5	9.7	7.6	1151.5	擦凹叩	火山礫凝灰岩
20	23	D－16	10.1	10.6	6.9	906.5	擦凹叩	緑色凝灰岩
21	15	D－16	14.6	12.2	5.7	1307.2	擦凹叩	変朽安山岩
23	18	C－14	9.4	3.1	4.2	420.1	擦凹叩	輝石角閃石安山岩
	112	D－16	10.2	8.4	4.8	559.3	擦凹叩	変朽安山岩
	114	表採	8.1	7.7	4.5	306.9	擦凹叩	火山礫凝灰岩
	115	東拡張区	(7.1)	8.4	4.9	373.3	擦凹叩	石英粗面岩
	116	B･C－14	18.1	14.6	5.2	1618.6	擦凹叩	火山礫凝灰岩
	117	C･D－13･4	(24.7)	(9.8)	9.1	2451.6	擦凹叩	火山礫凝灰岩
④－２擦石類								
図 NO	実測 NO	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さｇ	備考	石　質
22	21	排土中	13.5	14.8	4.1	439.3	擦叩	輝石角閃石安山岩
24	22	C－13	17	6.5	2.8	469.9	擦叩	角閃石安山岩
25	24	表採	7.8	7.9	4.3	389.3	擦叩	珪岩
	113	D－7	8.2	5.8	3	198.9	〃	緑色凝灰岩
	118	D－14	10.4	8.8	6	754.4	〃	凝灰岩
	119	D－14	(7.6)	(9.5)	(4.4)	444.4	〃	珪岩
	120	C･D－13･4	7.7	(5)	3.5	204.9	〃	珪岩
	121	D－9	6.8	6.1	4.6	268	〃	珪岩
	122	D－13	11.4	8.9	6.3	908.8	〃	角閃石安山岩
	123	C･D－13･4	19.1	10.1	7.8	2209.6	〃	角閃石安山岩
	124	C－14	15.8	5.7	5.4	576.4	〃	角閃石安山岩
	125	D－9	(7.2)	(4.6)	(4.9)	152.4	〃	変朽安山岩
	126	E－16	(6.6)	(4.2)	(2.4)	64.2	〃	凝灰岩
	127	D－7	17.9	6.4	5.3	856	〃	角閃石安山岩
⑤石錘								
図 NO	実測 NO	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さｇ	備考	石　質
26	26	E－8	3.7	3.2	1.1	14.5	切目	凝灰岩
27	27	D－8	4.6	4	2.3	46.1	切目	凝灰岩質砂岩
28	50	D－14	6.3	4.5	2	76.9	切目	凝灰岩
29	28	D－6	7.5	4.8	2.7	133.3	切目	凝灰岩
30	31	D－6	6.8	5.5	2.6	130.1	打欠	石英粗面岩
31	33	C－14	6.3	4.5	2	79.9	打欠	変朽安山岩
32	34	D－14	6.3	4.9	1.5	47.5	打欠	白色凝灰岩
33	29	D－7	4.6	4.1	1.2	26.5	打欠	変朽安山岩
34	30	D－7	4.6	4.2	1.5	40.9	打欠	凝灰岩
35	32	表採	7.5	6.7	2.9	190.6	打欠	流紋岩
35	36	C－9	7.9	4.6	1.3	54.3	〃	流紋岩
36	35	C－14	8.7	6.7	1.8	109.5	〃	珪化白色凝灰岩
	128	D－7	4.9	4.2	2	43.7	切目	変朽安山岩
	129	D－9	(5.1)	(5.4)	(1.1)	33.7	打欠	凝灰岩
	130	東拡長区	(5.4)	(3.9)	(1.2)	25.2	〃	砂質凝灰岩
	131	C－5	5.6	5.5	1.3	50.5	〃	角閃石安山岩
	132	D－7	6.3	4.2	1.6	62	〃	凝灰岩
	133	C－8	6.4	5.2	2.2	81.6	〃	石英安山岩
	134	D－7	5.6	6.1	2.5	100	〃	石英安山岩
	135	BC－14	6.2	4.2	1.5	53	〃	白色凝灰岩
	136	D－14	6	4.9	1.6	48.2	〃	凝灰岩
	137	E－6	6.5	5.2	1.7	66	〃	石英安山岩
	138	D－6	5.6	4.6	1.7	51	〃	凝灰岩
	139	D－8	6	5.6	2	67.5	〃	白色凝灰岩
	140	E－7	5.9	5.6	1.5	53.6	〃	緑色砂質凝灰岩
	141	排土中	6.6	3.3	1.7	44.2	〃	変朽安山岩
	142	D－14	6.4	6	2.3	125.2	〃	花崗岩
	143	D－13	8.1	5.1	2	90.3	〃	凝灰岩
	144	D－14	7.7	5.8	2.2	110.3	〃	石英安山岩

第６表　下鴛原石器計測表Ⅲ

図版 NO	実測 NO	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さｇ	備考	石質
	145	Ｄ－７	8.3	5.5	2	93.6	打欠	緑色凝灰岩
	146	Ｂ－７	(4.6)	4.6	1.8	53.4	〃	凝灰岩
	147	南壁断面	(4.8)	(4.1)	(1.7)	49.2	〃	角閃石安山岩質凝灰岩
	148	Ｅ－９	5	3.3	1.2	24.8	切目	細粒砂岩
	149	ＣＤ－８	3.1	2.6	1.6	16.3	打欠	輝石安山岩
	150	Ｂ－４	10.4	6.2	1.7	136.7	〃	流紋岩
	190	Ｃ－８	6.1	4.1	2.8	59	〃	凝灰岩
⑥石鏃類								
図版 NO	実測 NO	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さｇ	備考	石質
38	38	不明	3.5	2	0.6	2.7		珪化白色凝灰岩
39	37	Ｄ－９	4.4	2.8	0.9	7.7		珪化白色凝灰岩
40	39	不明	5.7	3.6	1.4	21.5		珪化白色凝灰岩
⑦剝片類								
図版 NO	実測 NO	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さｇ	備考	石質
41	41	排土中	4.8	4.7	1.2	22.5		珪化層灰岩
42	46	Ｅ－15	7.2	8.8	1.2	66.9		珪化白色凝灰岩
44	42	ＣＤ－89	4.1	4	1.1	17		珪化白色凝灰岩
45	44	ＣＤ－89	5.9	4.4	1.4	32.5		流紋岩
47	45	Ｄ－８	5.4	7.8	1.7	57.7		珪化凝灰岩
48	49	Ｄ－８	4	3.3	0.8	8		珪化層灰岩
49	43	不明	4.7	2.8	0.8	10.2		流紋岩
50	40	Ｄ－８	4.1	6.1	1.6	39.2		珪化白色凝灰岩
	151	表採	9.3	9.5	1.7	139.6		中粒砂岩
	152	表採	6.4	8.4	2.5	147.7		珪化凝灰岩
	153	Ｄ－14	5.8	7.3	1.4	65.7		凝灰岩
	154	Ｄ－14	6.8	11	2.6	174.1		凝灰岩
	155	表採	5.7	7.5	1.1	44.9		緑色凝灰岩
	156	Ｄ－14	(8)	(8.5)	(2)	169.6		角閃石安山岩
	157	Ｄ－14	4.9	7.1	2.2	51.3		細粒砂岩
	158	表採	6.6	6.3	1.1	53.1		珪化凝灰岩
	159	排土中	6.3	6.9	1.7	80		細粒砂岩
	160	Ｃ－９	5.6	5.7	1.6	60		珪岩
	161	Ｄ－６	4.8	5.2	0.9	16.2		珪化白色凝灰岩
	162	不明	2.9	4.7	0.9	10.5		珪化白色凝灰岩
	163	Ｃ－12	5.5	4.4	1.1	26		珪化白色凝灰岩
	164	Ｄ－10	3.5	5.1	0.8	15.7		珪化白色凝灰岩
	165	Ｅ－17	6	5.1	1.5	40.8		珪質岩
	166	南壁断面	5	6	1.3	36.7		珪化白色凝灰岩
	167	ＣＤ－9･10	4.5	5.3	1.3	19.3		珪化白色凝灰岩
	168	Ｄ－13	5.1	3.6	0.7	11.2		珪化白色凝灰岩
	169	ＣＤ－8･9	3.8	3.1	1.6	18.1		珪化白色凝灰岩
	170	Ｃ－７	3.6	3.7	0.9	9.3		珪化白色凝灰岩
	171	Ｄ－６	3.4	2.9	1.6	19.5		珪化白色凝灰岩
	172	表採	3.3	3.7	1.6	20		チャート
	173	表採	4.3	3.2	1.3	21		珪質岩
	174	Ｄ－９	3.9	3.1	1.1	9.7		珪化白色凝灰岩
	175	排土中	3.2	2.9	0.5	4.5		珪化白色凝灰岩
	176	Ｄ－15	3.1	3.3	0.7	8.6		珪化白色凝灰岩
	177	南壁断面	3.5	2.7	0.9	6.8		珪化白色凝灰岩
	178	Ｅ－13	3.8	2.7	0.9	7.3		珪化白色凝灰岩

第７表　下鶯原石器計測表Ⅳ

⑧石核								
図 NO	実測 NO	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さｇ	備考	石　質
43	47	C－7	9	12.4	3.4	279.6		流紋岩
46	48	D－14	9.3	6.9	4.5	278.8		珪化層灰岩
	179	C－14	6.1	10.6	5.7	380.1		珪化白色凝灰岩
	180	不明	7.1	9.4	3.6	189.2		珪化砂岩
	181	C－13	10.9	14.1	9.2	1573		白色凝灰岩
	182	D－14	4.7	3.6	2.1	32.3		白色凝灰岩
	183	D－8	3.1	4.5	1.5	25.9		白色凝灰岩
	184	表採	6.4	6.6	3.9	157.8		白色凝灰岩
	185	C－3･4	8.2	3.3	4.4	127.3		白色凝灰岩
	186	D－8	5	6.9	4.2	180.4		凝灰岩質泥岩
	187	D－14	6.4	5.4	2.7	111		白色凝灰岩
	188	D－10	4.7	7.1	3	109.3		珪岩
	189	C－14	5.3	7.8	3.1	136		白色凝灰岩
⑨	実測 NO	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さcm	備考	石質
不明	192	C－4	7.8	2.4	1.3	18.1	不明	凝灰岩
	193	C－7	11.2	6.5	3.6	408	不明	凝灰岩
	194	E－15				52	不明	凝灰岩
	195	C－9				13	不明	
	196	南壁断面	3.6	3.4	0.8	9	不明	
	197	D－7	5.5	3.8	2.4	28	石錐	珪岩

第８表　下鶯原底部観察表

NO	区	底径	残存率	底部圧痕	胴部模様	備考	NO	区	底径	残存率	底部圧痕	胴部模様	備考
1	C－13	11	4/5	無文			39	D－14	18	1/10	無文	無文	
2	C－13	13.5	1/4	縄文圧痕			40	D－14	11	1/12	無文	無文	
3	C－13	12	1/12	無文			41	D－14	12	1/12	無文	無文	
4	C－13	11	1/12	網代	撚り糸		42	D－14	8	1/12	無文	無文	
5	C－13	14	1/12	無文	無文		43	D－14	8	1/8	葉脈	無文	
6	C－13	12	1/12	無文	無文		44	D－14	8	1/12	無文	無文	
7	C－13	15	1/12	無文	縦条痕		45	D－14	12	1/12	不明	無文	
8	C－13	6.5	4/5	無文			46	D－14	8	1/12	不明		
9	C－13	8	1/4	葉脈／すだれ		◆ A	47	D－14	11	1/12	不明	撚り糸	
10	C－13	13	1/12	不明			48	D－14	16	1/4	網代		◆ I
11	C－13	11	1/12	不明	隆帯		49	D－14	13	1/6	無文		
12	C－14	17	1/10	すだれ		◆ B	50	D－14	8	1/6	無文		
13	C－14	10	1/6	無文			51	D－14	13	1/10	無文	無文	
14	C－14	8	1/12	不明			52	D－14	11	1/4	網代		◆ J
15	C－14	8	1/5	不明			53	D－14	8	3/5	無文		
16	C－14	12	1/12	不明			54	D－14	9	1/12	無文		
17	C－14	10	1/12	不明			55	D－14	8	1/12	すだれ	無文	◆ K
18	C－14	9	1/12	網代		◆ C	56	D－14	8	1/12	不明		
19	C－14	9	4/5	無文			57	D－14	8	1/10	無文		
20	C－14	12	1/12	無文			58	D－14	9	2/3	無文		
21	C－14	10	1/12	網代	縦条痕	◆ D	59	D－15	11	1/10	網代	無文	◆ L
22	C－14	12	1/12	すだれ	撚り糸	◆ E	60	D－15	11	1/2	無文		
23	C－14	8	1/4	無文			61	D－15	12	1/12	不明	無文	
24	C－14	12	1/12	無文	無文		62	D－15	16	1/4	不明	沈線	
25	C－14	10	1/12	無文	ＲＬ縄文		63	D－15	8	1/12	不明		
26	C－15	11	1/12	すだれ	ＲＬ縄文	◆ F	64	D－15	8	1/12	すだれ	無文	◆ M
27	C－15	9	1/12	不明	隆帯区画		65	D－15	12	1/12	網代		
28	C－15	8	1/12	無文			66	D－15	9	1/12	無文	無文	
29	D－14	12	1/9	網代	ＬＲ縄文	◆ G	67	D－15	12	1/12	不明		
30	D－14	9	1/12	無文			68	D－15	12	1/9	無文		
31	D－14		1/12	網代	無文	◆ H	69	D－15	9	1/12	すだれ	無文	

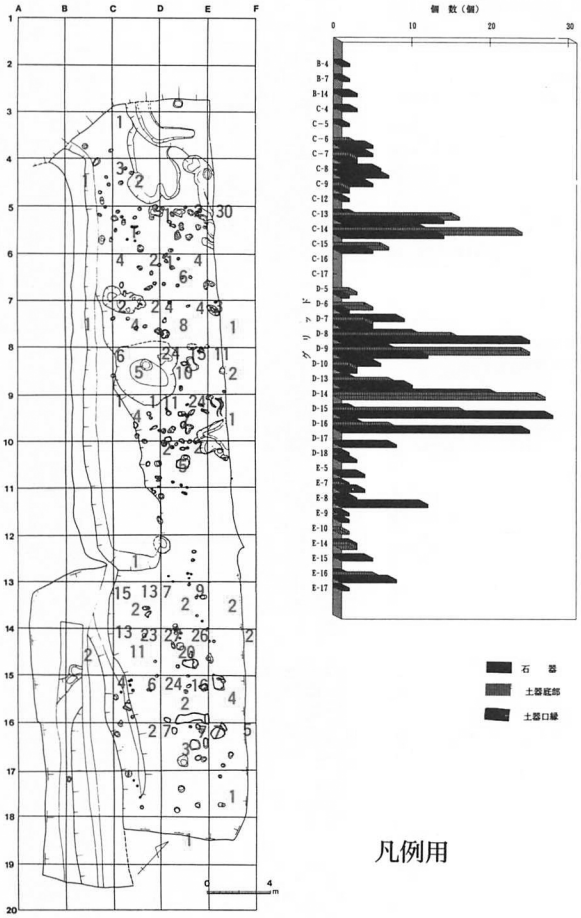
NO	区	底径	残存率	底部圧痕	胴部模様	備考	NO	区	底径	残存率	底部圧痕	胴部模様	備考
32	D−14	9	1/12	無文	無文		70	D−15	14	1/12	網代	無文	
33	D−14	6	1/12	不明			71	D−15	14	1/12	網代	縄文	
34	D−14	8	1/12	不明			72	D−15	12	1/12	無文	縄文	
35	D−14	12	1/12	無文			73	D−15	7	1/12	無文	撚り糸	
36	D−14		1/12	不明	ＬＲ縄文		74	D−15	12	1/12	無文	縄文	
37	D−14	12	1/12	不明	撚り糸		75	D−15	12	1/12	無文	縄文	
38	D−14	13	1/8	無文	無文		76	D−15	11	4/5	葉脈	撚り糸	
39	D−14	18	1/10	無文	無文		77	D−15	14	1/12	網代		
40	D−14	11	1/12	無文	無文		78	D−15	7	1/2	すだれ		

第９表　下鴛原土器集中区土器出土状況

		C−13	C−14	C−15	D−13	D−14	D−15	総　数
口縁	刺突	1				5	1	7
	無文	11	16	4	8	18	11	68
	縄文					1		1
	撚り糸					1		1
	沈線	2	2				4	8
	条痕						1	1
	隆帯　表	2	3			4	9	18
	裏		1				1	2
胴部	刺突	5	6	3	13	4	8	39
	無文	109	187	21	67	415	251	1,050
	縄文	29	83	3	25	137	67	344
	撚り糸	4	8		4	9		25
	沈線	10	51	10	17	81	27	196
	条痕	7	28		12	47	19	113
	隆帯　表	3	9			15		27
	裏		5				10	15
底部	無文	14	25	5	13	31		88
	痕跡有	13		1		10	19	43
	総数	210	424	47	159	778	428	2,046

補　記

土器集中区の土器について文様観察、部位（口縁・胴部・底部）別に破片数の計測を、ならびに土器底部の観察を行った。土器は、指頭大のものを計測の対象とした。第８表表中◆のものは図版16下部に掲載したものである。磨耗が激しく、良資料とは言い難い。



第23図　石器・土器出土状況図

第6章　ま　と　め

本遺跡は、犀川の段丘上に営まれた縄文時代の集落遺跡の縁辺部にあたろう。住居跡の確認はできなかった。

土器の出土は包含層内で、遺存状況が悪かったため、全形を復原できる土器はなかった。串田新式～前田式に比定できる土器（図16－24～31、15－２）の１群が存在し、福井県右近次郎遺跡[1]12群～14群の土器群、（図16－27・28・29）および中津・称名寺式（図16－23・30）も存在する。

特徴的に確認できた土器は、いずれも隆帯、微隆帯を持つ土器（１類）で口縁辺外面および内面にも微隆帯を持つ。装飾的施法と、波状を支える機能の両面からの付帯が考えられよう。犀川の対岸に営まれた集落遺跡東市ノ瀬遺跡[2]・金沢市北塚遺跡[3]でも同様の土器を確認できる。串田新Ⅱ式にみられる、口縁内面の沈線加飾も考慮に於きたい。また、大杉谷式の色彩が濃い土器群であるともいえよう。

土器の胎土は、赤褐色で脆弱な土器が少数入るが他は、一律にぶい橙色である。施文具は、ほとんど周辺森林及び草地での動・植物類が多数を占める。ただし貝殻圧痕についてのみ、サルボウ等に比定されている海洋性の貝殻を用いて施文している。底部圧痕は、網代・すだれ・葉脈（笹の葉状）がみとめられる。葉脈とすだれの併存も認められる。編み物、笹類を敷く状況下で製作がされ、多くは製作後ナデ調整がされている。土器、施文具のサルボウは、覗きの砂子板層中で確認されてはいる[4]が、海洋性の貝であり土器または施文具材の流通が想定される。

石器も、土器集中区のC・D－14～16区に集中して確認された。磨製石斧の石質の輝緑安山岩のみ異地性の石質であり、他の180個以上の石器すべてが、最寄りの産出地としては、犀川中・上流域の石質よりなる石器であることが確認できた。

以上より、下鴛原ナカダン遺跡は、縄文時代中期後葉～後期初頭にかけて、営まれた集落の縁辺である。犀川中・上流産の多数の石材を石質とする石器の出土状況、及び異地性石器の希少性、チップ・素

材となる石の出土から見て当地付近で石器生産の加工がされていたと想定される。また石器の組成は、擦り石類の比率の多さが確認されることから、当該期、当該地域での生産活動および、当該地域の食制について考える1つの資料となろう。

その後長期間、遺跡が途絶えるが、近世に入り藩政による水田耕作の拡大で棚田の造成がされ、現代まで集落が存続することとなった。

出土資料は、良好な資料であるにもかかわらず、力不足のため活かせなかったことを、お詫びしたい。

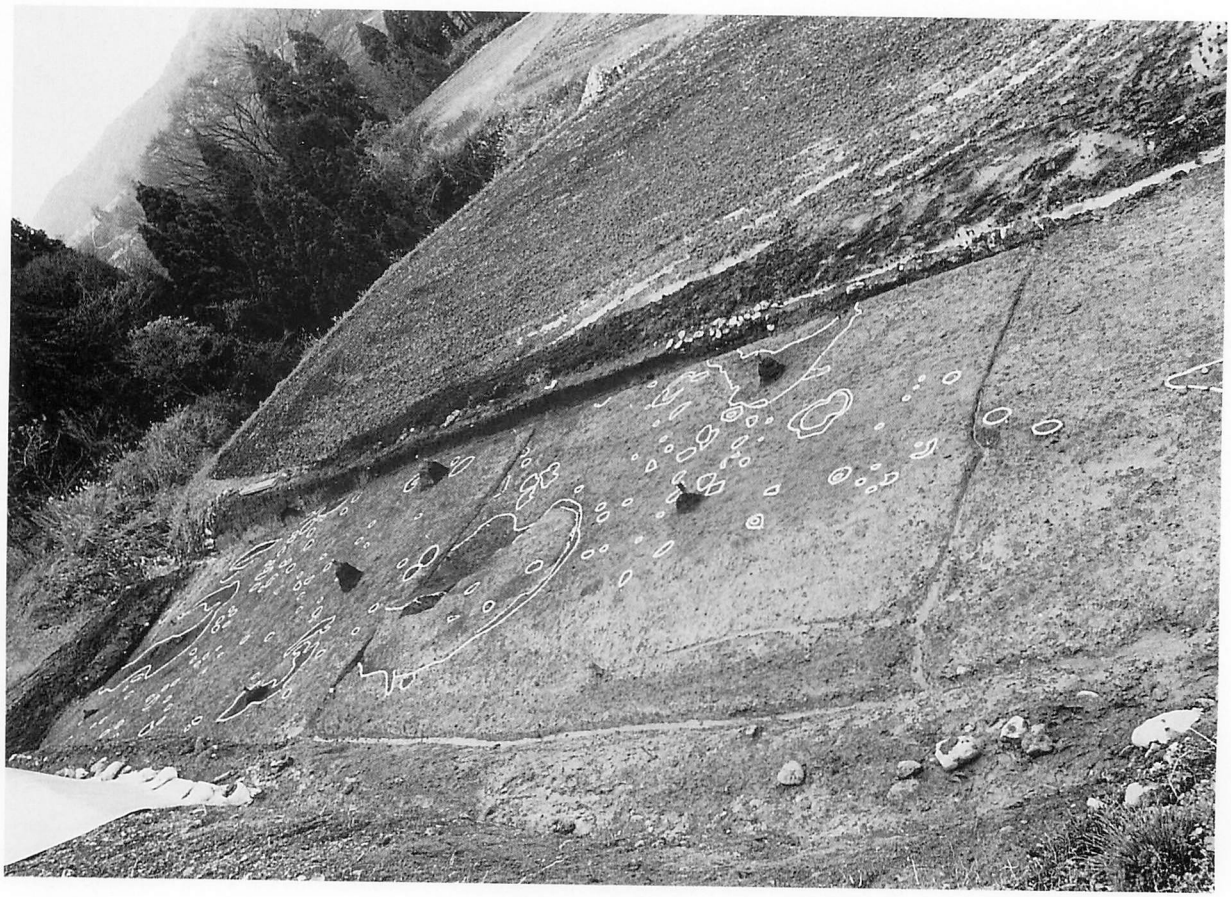
＜註・参考文献＞

(1) 工藤俊樹他『右近次郎遺跡Ⅱ』大野市教育委員会　1985年
(2) 南　久和　『東市ノ瀬遺跡』金沢市教育委員会　　1985年
(3) 松浦郁乃・宮川勝次『北塚遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1998年
(4) 高掘勝喜他『加賀辰巳用水東岩隧道とその周辺』加賀辰巳用水東岩隧道調査団　1989年
本田秀生他『六橋遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1996年
木立雅朗他『北塚遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1993年
安　英樹　『富来町貝田遺跡・貝田Ｃ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1995年

P L A T E

図版1　遺構検出状況

南より



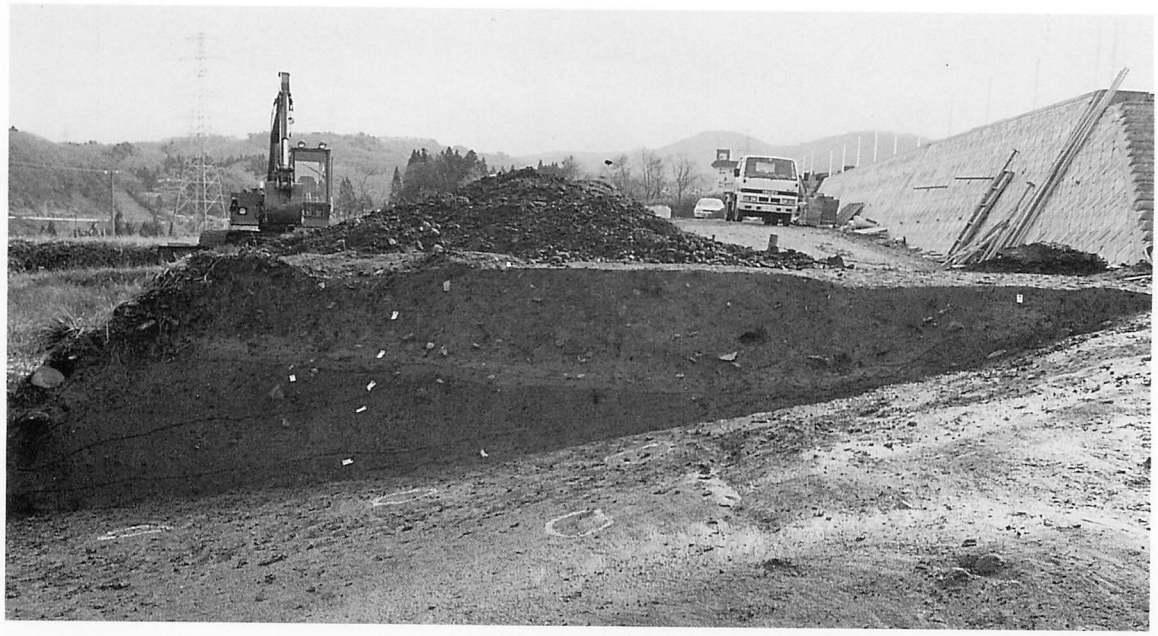
西より

図版2　完掘状況

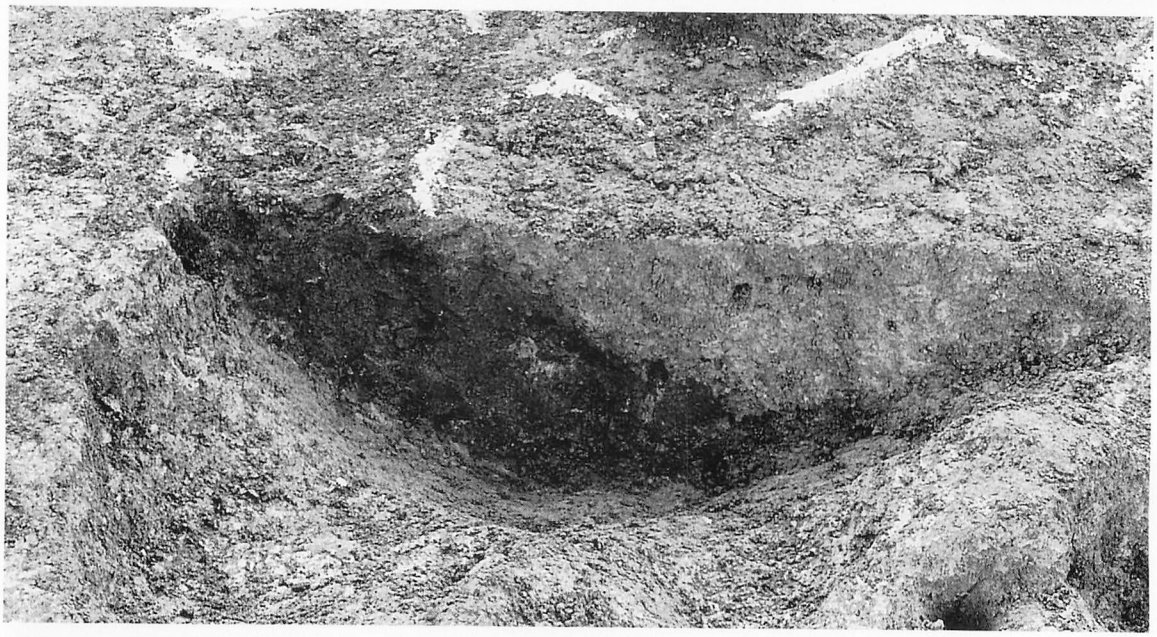
南より

北より

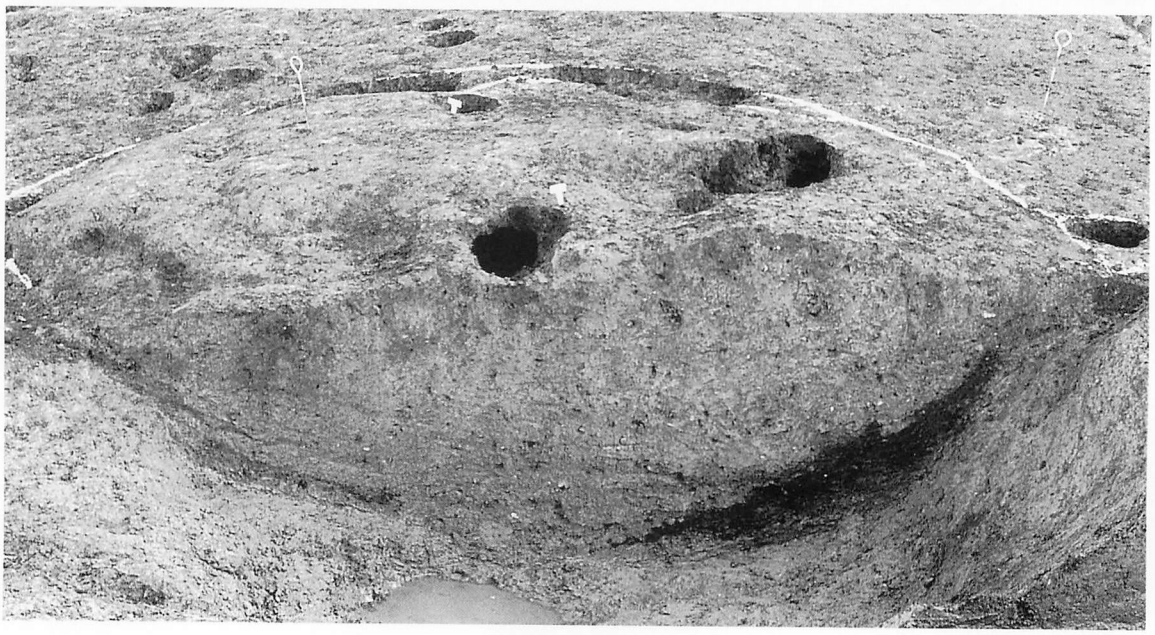
図版3　南壁土層断面・風倒木断面図



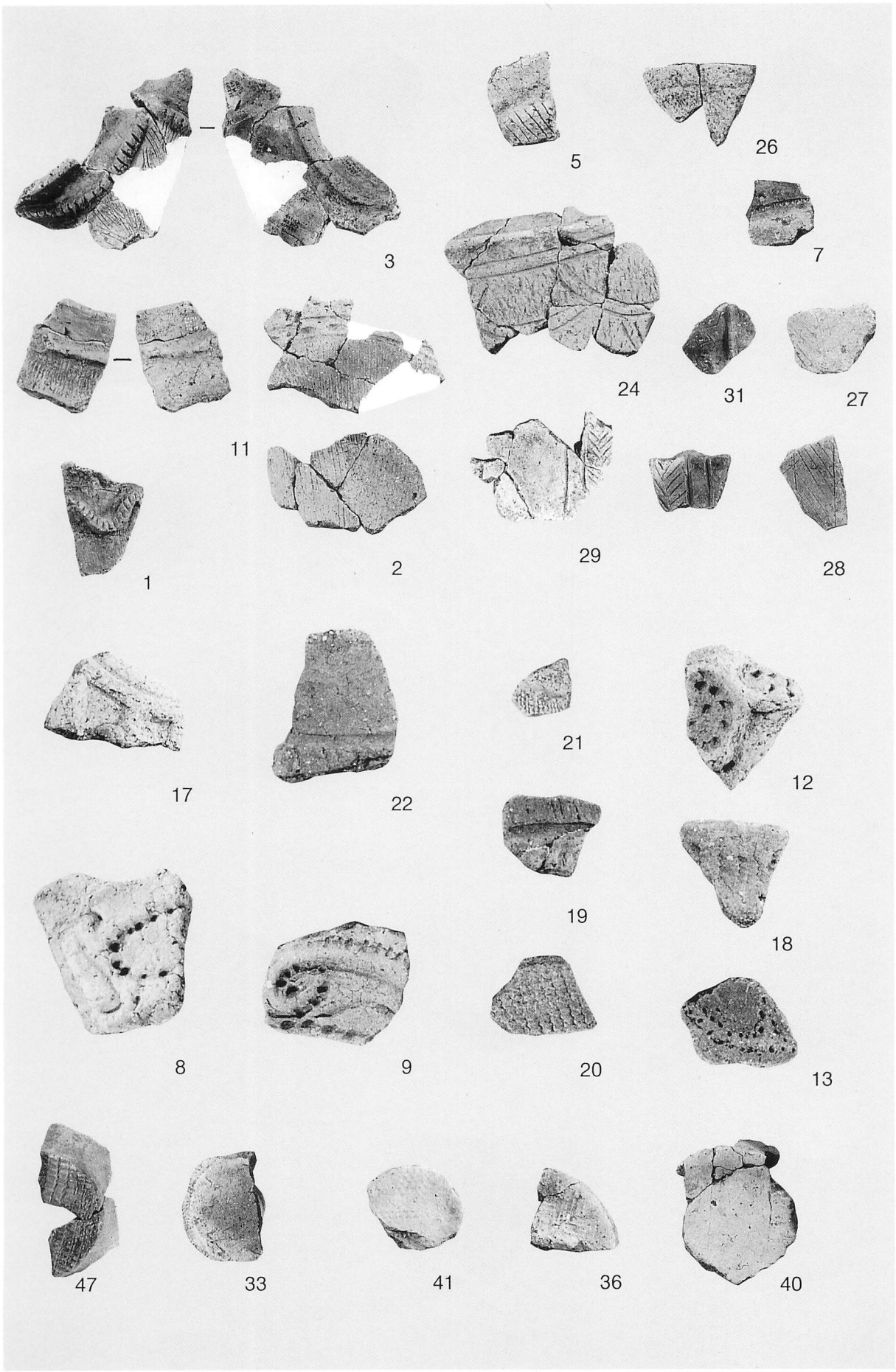
風倒木1



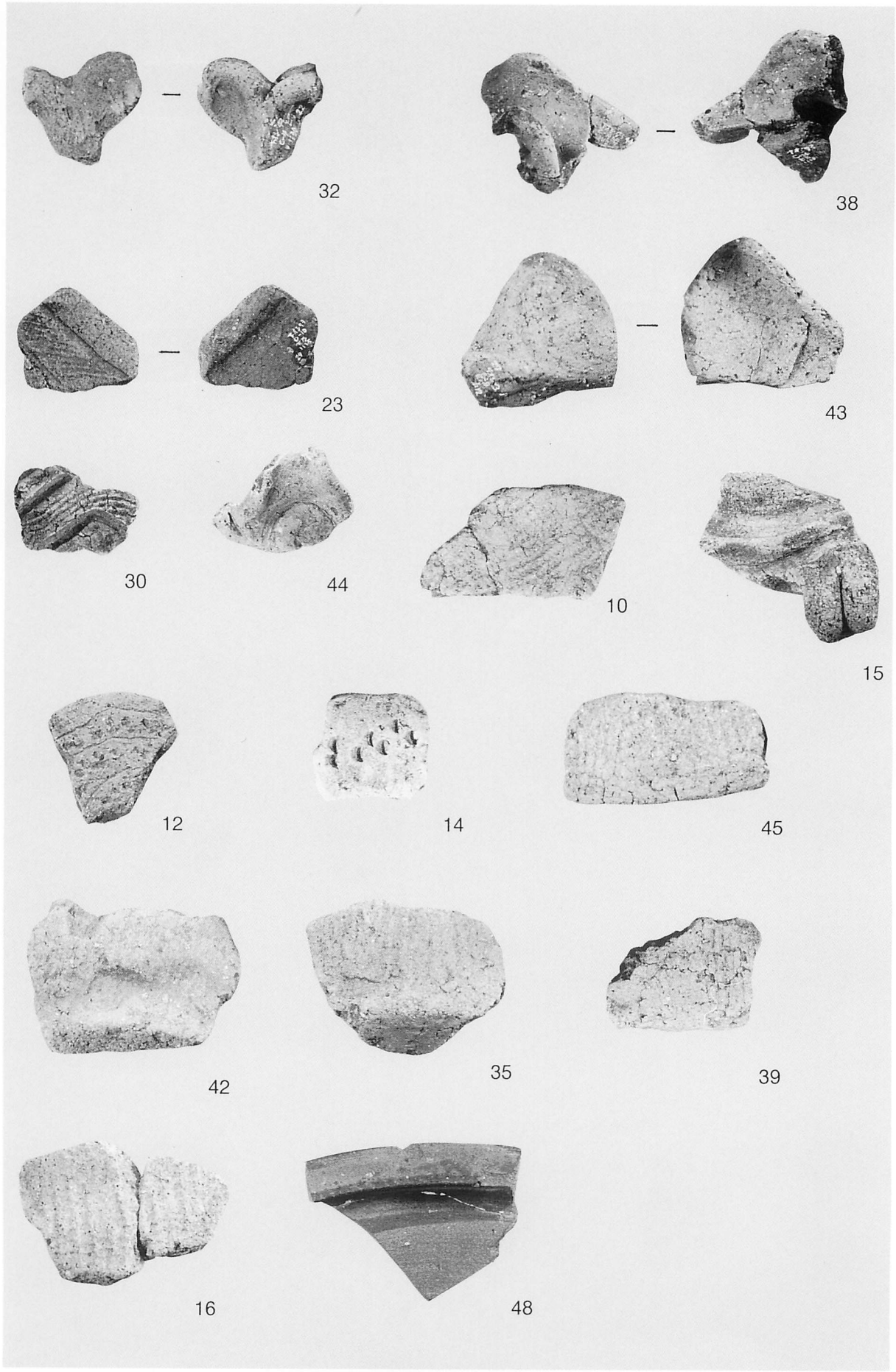
風倒木3



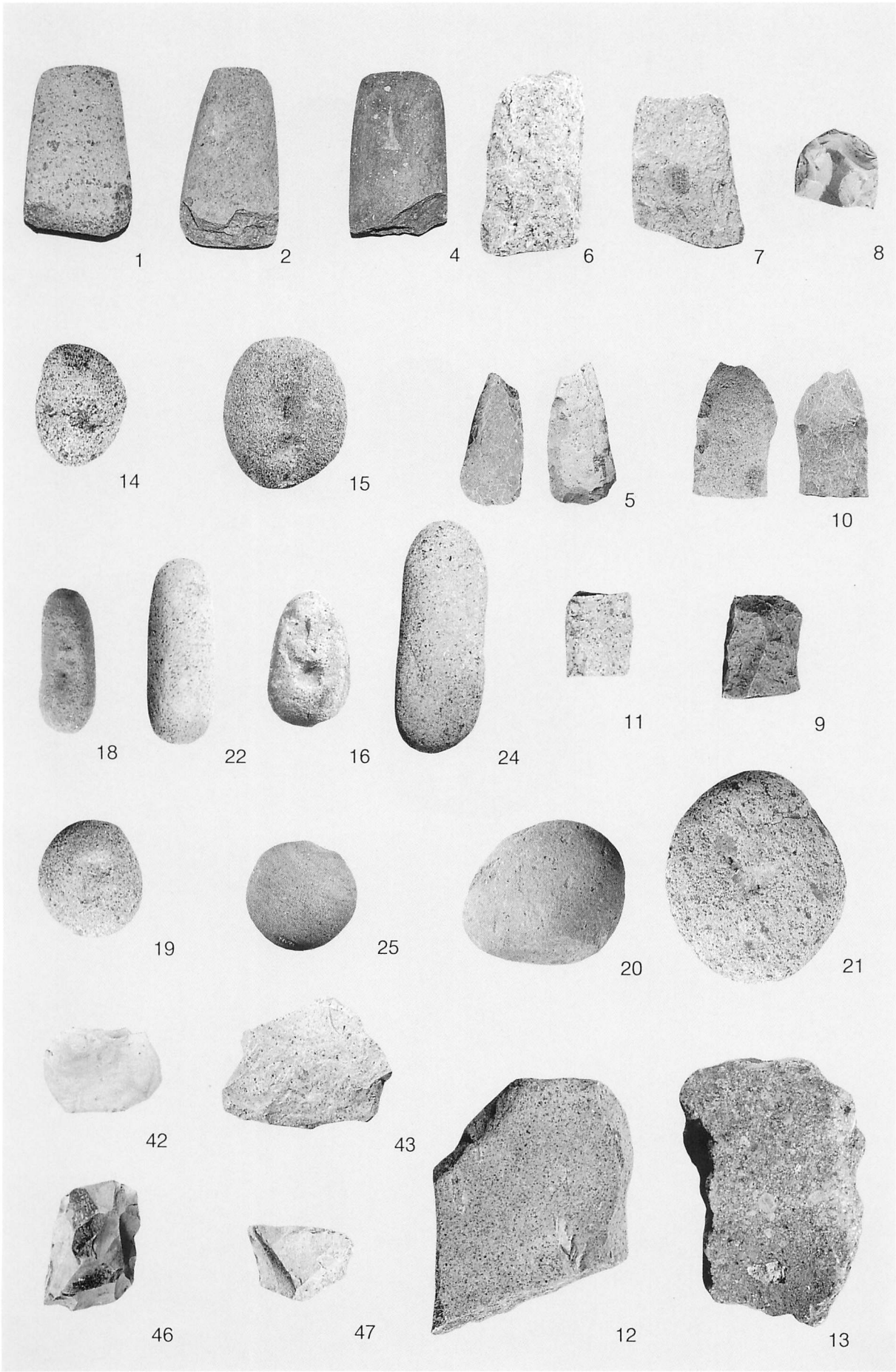
風倒木2



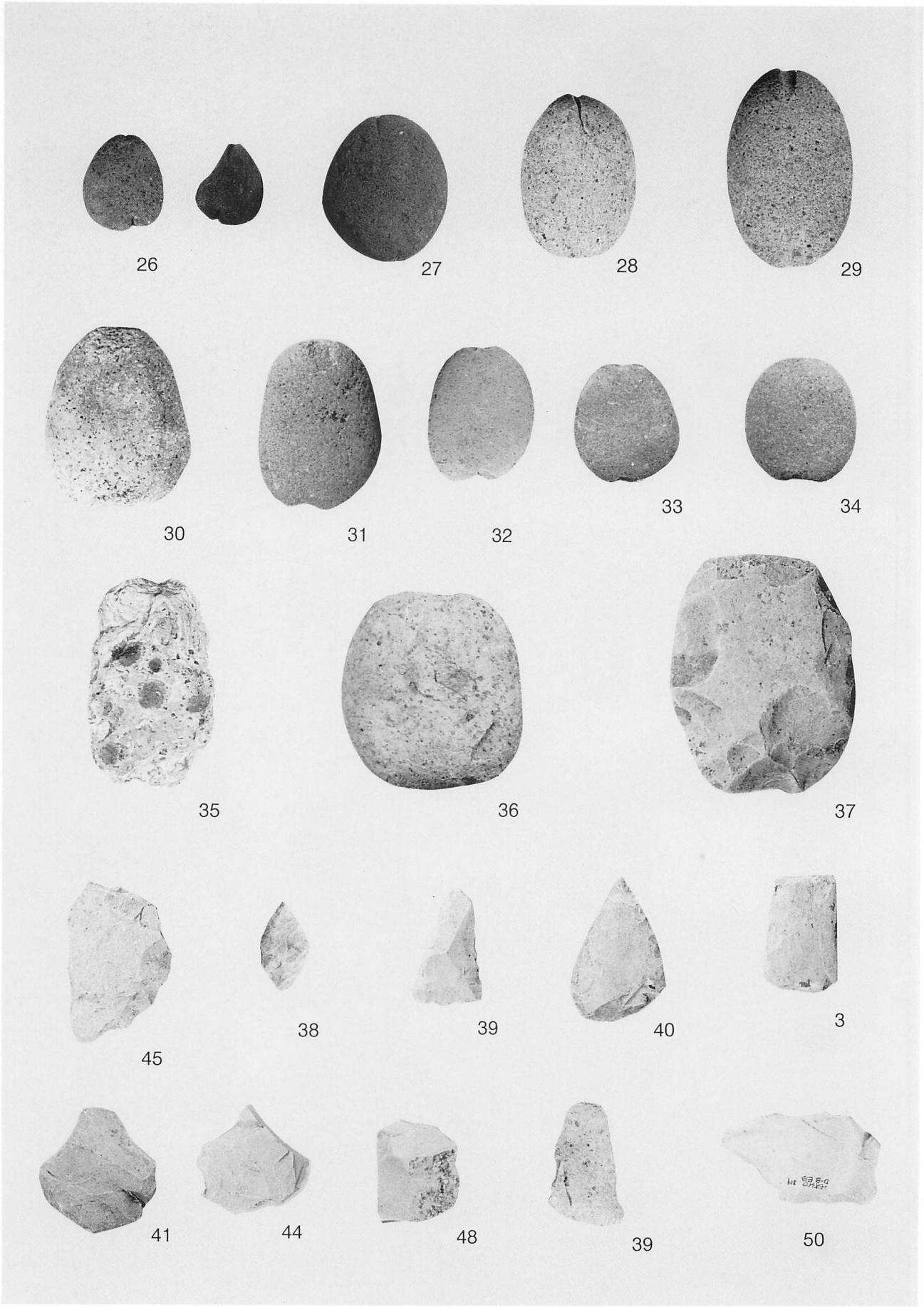
出土遺物1（土器）



出土遺物2（土器）



出土遺物3（石器）



出土遺物4（石器）

報告書抄録

ふりがな	しもおしはらなかだんいせき
書名	下鴛原ナカダン遺跡
副書名	犀川総合開発事業付替工事に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	澤田まさ子
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター
所在地	〒921-8044　石川県金沢市米泉町４丁目133番地　TEL 076－243－7692
発行年月日	西暦1998年３月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査 面積㎡	調査原因
下鴛原ナカダン遺跡 しもおしはら いせき	石川県金沢市下鴛原地内 いしかわけんかなざわし しもおしはらちない	17201	01027	36° 29′ 28″	136° 42′ 59″	19931101 ～ 19940120	800	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下鴛原ナカダン遺跡	集落跡	縄文時代 近世		縄文土器、石器、 近世陶磁器	

下鴛原ナカダン遺跡

平成10年３月25日　印刷
平成10年３月27日　発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町４丁目133番地
〒921-8044　電話（076）243－7692番㈹
印　　刷　能登印刷株式会社